
魔法少女リリカルなのは 元医者がゆく

僚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 元医者がゆく

【Nコード】

N1034T

【作者名】

僚

【あらすじ】

現役の医者が死んで転生してリリカルなのはの世界で色々やっていくお話です。

処女作で駄文で更新不定期です、それでもよい方はお進みください。

誹謗中傷などは書き込まないでください。

誤字脱字などはご指摘ください。

プロローグ（前書き）

たくさんの方の小説を読んで書き込みました。

誤字脱字などあったらご指摘ください。

それではどうぞ

プロローグ

俺の名前は中村^{なかむら} 航^{こう}27歳でただのしがない医者だ。彼女は居ないが別に今まで一度も居なかったと言う訳ではない何年か前に別れたちなみに非童貞だ。

さて、俺の自己紹介はこれで終わりとして……諸君に聞きたいココは何処だ？

周りは何も無い白い空間で居るのは俺だけ、ここに来るまでの前後の記憶が無いこれから如何しよう……

「いらっしやい。」

「えっ」

気がつくと後ろに知らない男が立っていた。だれだコイツ？

「コイツは無いんじゃないかなあ、神様に対して」

「いや知らんし、っつーかココどこなのか教えてくれよ？」

……ちょっと待て？今コイツなんて言った？

「神様だと？」

「そ、いわゆる君たちの上位種にあたる存在だよ」

コイツはいきなりとんでもない事を言いやがった。

「解った解った、神様が居るのは良いとして何で俺がココに居るんだ？」

「あれっ？覚えてないの？君ココに来る前に車に撥ねられたんだよ
そう言われた瞬間、俺は全てを思い出した。ココに来る前に路上で
心臓発作を起した人に心臓マッサージをしていて撥ねられたんだ、
つく心臓発作を起した人はどうなった？」

「あそこに倒れた人はどうなったっ！？」

「オイオイツかみ搔かなよ。あそこに居た人なら助かったよ、いやあ助かったよ……と言つても君が死んだから意味が無いんだけどねえ」

コイツはため息をつきながらそんな事を言いやがった。

「は？どういう事だ」

「いやね、人の寿命を管理していたんだけど、ついつい手が滑つてねあの人の心臓を止めちゃったんだよ。いやあ原則的に神様が世界に手を出すことが禁じられてるからねえ、さすがに焦った……っが、痛いなあいきなり殴るとかやめてよね、神様でも殴られると痛いんだから」

「うるさいっ！！。お前人の命を何だと思つてんだ」

「解ってるよ。だから本当に悪いと思つてるよ、それと君の心に敬意を表しているんだサービスで異世界に転生させてやるよ」

「はっ？お前なに言ってるんだ、命って言うのは一度きりだからすばらしいんだ」

だから二度目の命には興味ない

「解ってるって、だから言っただろサービスだつて。こっちで能力とか魔力とか決めといてやるから、そうだなアンサートーカーでいいか自分でオンオフ切り替えるようにしてを居てやる。あつ、使い方は頭に直接送り込んでおくから、とりあえず行って来いそこで人並みの人生を送って来い。んじゃあな」

「は？」

突然俺の足元に穴が開いて俺は重力にしたがって落ちていった。

「うあつ！！」

俺が重力にしたがって落ちるとソコには森が広がっていた。

「いてて、あの野郎…あれ何だこの紙」

開いてみるとソコにはあいつからのメッセージが書いてあった。

この手紙を読んでいるって事は無事に異世界にいけたって事だな、まあお前の能力は下に書いてあるとうおりだ。

能力その一
アンサートーカー

この能力はあれだお前も知っている通り『金色のガッシュユベル』にあるどんなことでも理解して答えを出す能力だ。

能力その二

魔力だ、そこそこ高いほうにしておいた。

まあ、これぐらいだお前の人生だ頑張りな。

追伸、その世界には気や『月姫』などにある魔術に使う魔力など違う力がある。

「はあ……、あいつ……ん？今、何か音が聞こえた気が……」

「結構遠くからきこえるな、これは……叫び声？よしっ行ってみるか」

音が聞こえたあたりからすると結構遠く出し走るか

「はあ、はあ、……なんだよこれ」

丘の上に出た俺は目の前にある光景に絶句した。丘の下では人が人を剣や槍で殺している、まるで戦争のように……いや、これは戦争だ。

「クソッ。ああ、わかったよ生き残ってやるよ」

俺はこの日生き残ることを心に決めた。

何でもないと言い切れないがまあそれなりの日常（前書き）

作者はとらはの知識ゼロです。

内容はかなりグダグダです、それではどうぞ。

何でもないと言い切れないがまあそれなりの日常

そこは薄暗い部屋だった、その部屋に居るのは死んだ魚のような濁ったためパソコン画面に向かってる三十代位の男だった。

「ん？もう朝か……ふああ」

俺はPCの電源を落としてベッドに向かった。

あの神とか言うヤツが俺を転生？させてからかなりの時が経った。あの後すぐにアイツからデバイスが届いた、最初はあまり上手く使えなかつたけど今は完璧だ。まあそれから色々在って今は不老不死になった、今現在、そこそこでかい家を買ってなに不自由なく暮らしている。

俺はそつと目を瞑って寝る準備をした。

暗転

目が覚めた。いつの間にか寝ていた眠い目を擦りながら時計を見ると時刻は夕方だったどうやら12時間も寝ていたらしい。

「カナカ今日のこれからの予定は？」

俺は机に置いてあるナイフに話しかける。

「ちょっと待ってね……今日の予定は5時間後に仕事が入ってるよ。」

コイツは『カナカ』と言ってあの後アイツから送られて来た俺のデバイスだAIは名前から分かるように『シゴフミ』のカナカだ、頭もよくて中々使い勝手が良い。

「結構久しぶりな気がするな」

「そうだね、大体一年ぶりぐらいだね」

何で俺の仕事がこんなに少ないのかと言うと

「さて、仕事の準備でもするか。今日の仕事は何だ、護衛か？」

「いえ、暗殺です。」

いわゆる裏稼業なのだ、まあそれもあるが基本的に俺の仕事回数が少ないのだ年に1、2回有るか無いか

「うわあ、ダルそうだなあ、サボっていいかな？」

「良いわけ無いじゃないですか、逆に殺されますよ」

「はあ…、解ってるよ冗談で言ってみただけだ」

確かにカナカの言う通りなのだ、この稼業は一旦受けた依頼は途中で放棄してはいけないのだ…、いや放棄しても良いけどその後の報復から逃れられる確率が極端に少ないのだ。依頼を放棄すると言うのは組織への裏切りに他ならない、またその雇った者が敵に情報をリークするかも知れないからだ。だから依頼を放棄された組織は裏切り者を全力で探し出すのだ。

「とんでもない事言わないでよ、もう」

時計を見るとそこそこの時間がたっていた

「はあ、よし準備も出来たし行くか」

俺は武器を服の中にしまいカナカを腰のベルトに挿して家を出た。

「……なあカナカ、そっぴいえば場所ってどこだったけ？」

ここは都内有数の高級ホテルの一室、パーティーが終わり疲れたターゲットがやって来るのを待つ……

「はぁ……遅いなもうそろ「ガチャ」来たか」

部屋の奥まで来るのを待つか……

カツ、カツ、と足音がこちらに向かってくる

よし今だ、俺はターゲットが入ってきた扉を背にして話しかける。
この部屋の出口はこの扉一つしかない、これでの男は逃げられない。

「アンタ、鈴木源三郎だな」

「なっ、貴様何処から」

鈴木と呼ばれた男は驚きながらこちらを向く

「鈴木病院の院長で人身売買、そして病院で死んだ人間の臓器を裏に流している、他にも色々やっているみたいだな」

俺は事前に手に入れた資料の内容を口に出す。

「な、何故それを。まあいい」

男はニヤリと笑いながらそう言った。

「悪いがこの部屋の周りに居た奴等なら居ないぞ」

俺はそう言いながら銃を構える。すると男は顔色を変えながら

「たっ、頼む殺さないでくれ。君の雇い主の倍の金額を払う、そうだとそれに女もやろう、私は政財界にも顔も聞くと好きな女を好きなだけやろう」

そんな事を言い出した

「いやなに、アンタが散々好き放題してくれてこちらのクライアントさんがひどくご立腹でねえ」

「こっ、殺さないで」

バンと銃声が響いた

「あ”あ”ああ」

銃から放たれた弾丸は男の右の手のひらに貫通した

「アンタ今まで色々やらかして来たんだし諦めろよ」

また銃声が響く、今度は男の反対の手に当たった。

「いいねえ、もっと叫べよ」

銃を持った暗殺者は笑いながらそう言い放った。

数分前

私の名前は高町士郎、友人の護衛を頼まれこのホテルに来ている。友人はどうやらこのパーティーにあまり来たくなかったらしい、このパーティーに出席する何人かは余り良い噂が無いらしい。

前に居る男は拳銃を仕舞いながらそんな事を言ってきた。

はあ……ダルイ、しかもこの男は余計に警戒してるし。

「だからソッチが仕掛けてこないならコッチは何もしないって言うてんだろ」

刃を持った男は警戒しながらも頷いた。

はあ、ようやく家に帰れると思いホテルの部屋から出たらさっきの男が後ろから声をかけてきた。

「なんだよ」

「君の名前は？私は高町士郎だ」

「……中村航だ」

これで本当に帰れると思えば俺はホテルを出てケータイをかけた

「ターゲットは始末した」

すると電話越しから低い声が返ってきた

「わかった、約束どおり口座に7000万振り込んでおく」

すると電話が切れて俺はようやく海鳴にある我が家に帰った。

休日の過ごし方……まあ、いつも休日みたいなものだけど（前書き）

短いですけどどうぞ

休日の過ごし方……まあ、いつも休日みたいなものだけど

「ふう」

俺は公園のベンチに腰掛けてビールを飲んでいる。こんな休日がマジで最高だ。公園を見渡すと居るのは老人や主婦ばかりだ。

「まあ、平日だからな」

『こんな日にお酒を飲んでいるのはマスターくらいですよ』

カナカが念話で話しかけてきた

『別にいいだろ俺が休日をどんな風に使っても』

『はあ……』

カナカがため息をついてきた、機械なのにため息つくのか？

俺は飲んでいた少なくなったビールを横に置いてタバコを取り出し火をつける

「よしっ、ゲームでも買いに行くか」

俺は立ち上がりながら残りのビールを飲み干した。

「ふう、これぐらいで良いか」

外はすでに紅く日が落ちてきている。

俺の両手には大きな袋が二つある。一つはゲームでもう一つはインスタント食品だ。

「さすがに重いな……」

『マスターが買いすぎるからだよゲーム40個とかおかしいでしょ』

『新作だったからつい』

『もう』

自分のデバイスに呆れられている俺って、うわ何かへこんできた
そんなくだらないやり取りををしていると

「え」

「あ」

高町士郎が居た、俺は一瞬で荷物を下に置き服の中に忍ばせている
投げナイフに手をかけた

しかし、高町は構える様子が無い……

「どうした、構えないのか？」

「構えるも何も偶然会っただけなんだからそんなに構えないでほしいね」

……え、何それ。まるでおれ一人だけ構えて馬鹿みたいじゃん。

深夜

あの後、士郎（本人からそう呼んでくれと言われた）と話したら意外に気が合って居酒屋で一緒に酒を飲んでいて、話の内容はなんでもない夕ダの世間話だ。

二人は席を立ち店から出た。

「士郎これやるよ」

ほいと言う声と共に渡されたのは何も書いてない名刺サイズの黒いカード

「俺、本業は闇医者だから一応これでも腕には自信があるんだぜ、

これ一回だけ無料のサービス券」

「あ、ああ。ありがとう」

士郎はそのカードを受け取り財布に仕舞った。

「んじゃ、また今度飲みに行こうな」

「ああ」

二人は各々の家に帰った、片や温かい家族が居る家に、片や沢山の嫁が眠るPCの在る家にそれぞれ帰宅した。

はぁ……だるい(前書き)

今さらですが第一話を少し変えました。

それでは第四話はじまります。

はぁ……だるい

ソコは薄暗い部屋だったソコに居る男は一人でPC画面に向かって
ブツブツとつぶやいている

「……ここをこうやって……そこはここで……よしっ、フラグ回収
完了っ！！」

「ふう、これでこのゲームはクリアしたぜ……ってか、ふざけんな
よ何で一分毎に分岐点来るんだよ、しかも89%がバットエンドっ
てなんだよ！！作業ゲームかよ、おかげで一週間も徹夜しっちゃっ
よー！！」

PCの画面にはFINの文字

「よし、風呂にでも入るか」

俺はそう呟きながら部屋を出た。

数十分後

「ふぁ〜、サツパリした〜……やば、流石に不眠不休で一週間はマ

ズかったな」

俺は風呂から出た後すぐにベッドの中に倒れるように寝た。

暗転

「……ん。ふああ、良く寝たわ」

『おはようマスター』

「おお、カナカか、俺どれ位寝ていたんだ？」

「大体、二日間くらいだよ。ちなみに今は夕方の四時」

結構寝たな、俺

「良く寝たし飯でも食うか……」

「ちょっと待ってマスター。今、高町って人に渡したカードから反応が在ったよ」

あのカードは持ち主の生命が危険になるとカナカに信号が送られる用に出来ているんだけど……

マジか……

「なあ、サボっていいかな」

「流石にそれは拙いと思うよ……人として」

ですよねえ……、はあ……ダルい

「まあ、行くか。反応はどちら辺からだ？」

「結構近くだからこの辺の救急病院に運ばれるはずだよ」

じゃあ、あそこか

「行くか」

俺は急いで海鳴大学病院に向かった。

暗転

「ふう、手術も終わったし帰るか」

手術は無事に終わった、峠は越えたし後は時間の問題だ。今度見舞いに行くか。

「帰るついでにどこかでラーメンでも食いにいくか」

俺はラーメン屋を探しに街の方向に向かって歩いていった。

何で病院で余所者の俺が手術が出来たかって？

俺がここの院長と知り合いだからだよ。

ちなみに医師免許も一応持っている……………偽造だが。

ご都合主義とか言つなよ……………まあ否定はしないけど……………

はぁ……だるい(後書き)

第四話でした。

誤字脱字などがありましたらご報告ください。あと感想が貰えたら作者のやる気がアップします。

そつだ、お見舞いに行こうー！（前書き）

いつもの如く面白みの無いタイトルですがよろしくお願いします。

それでは第五話始まります。

そつだ、お見舞いに行こう！

そこはシミ一つ無い真っ白な部屋だった、部屋を吹き抜ける風は青い空が見える窓から入って来て部屋を一周してまた窓を通って抜けていく。

「……ん、此処は？私はたしか」

たしかミスをして怪我を……と言おうとすると

「よっ、久しぶり。そろそろ目覚める頃だと思ったよ」

そこにはあの時一緒に飲み合った彼がいた。

「いやあこのまま起きなかつたら俺が目覚めのキスをしてやる所だったぜ」

そんな事をしようとしていたのか……

「それは危なかった……」

「まあ……それは良いとして、どうしたんだあの傷……一歩ミスつたら死んでたぞ。あんまし人の仕事に口出す気は無いが、引き時だろ、今の仕事を辞めたほうがいい」

それ位あの傷はやばかった、手術したのが俺じゃなくても助かりはしていただろう……だが確率の問題だ、そして後遺症など問題だこの世界の技術では助かる確率は良くて二割だった、まあ助かったか

ら良いんだけど

「まあお互い命あつてのモノダネだからな、特にお前は結婚しているんだからなあんまり無茶すんなよ」

「ああ、これを期に引退するよ」

「そうかい、じゃこれやるよお見舞いと引退祝いをこめて」

俺は花を渡した

「……………」

「ん？どうした」

「いや…………この花…………根があるのだけど」

「そうだけどそれがどうしたのか？」

「一応教えておくけど「知っていてやった」……………そうか」

なんか疲れた顔してるな

「ほれ、家族に電話してやれよ」

俺はケータイを土郎にわたす

「……………ここは病院なんだが……………」

「当たり前だろ、ここがキャバクラに見えるのか？」

「いや、そういう事を言っているんじゃない……」

「良いから電話しろよ」

そう言って俺はケータイを押し付ける、ようやく観念したのか電話をかけた

数分後

「ありがとう、もう少ししたら妻が来るってさ、御礼をさせてくれないかい？」

「いや、気持ちだけ貰っておくよ。んじゃあ俺はこれで」

そう言って俺は病室を出た。

「よし、仕事も終わったし家に帰るか」

俺は家に向かって歩き出した。

そつだ、お見舞いに行こうー！（後書き）

誤字脱字などありましたらご報告ください。

あと感想が貰えたら作者はやる気が上がります

本当に今さらだけど主人公のパラメーター（前書き）

タイトルの通り主人公のパラメーターです。

本当に今さらだけど主人公のパラメーター

中村 航

身長 187cm

体重 70キログラム

魔力ランク S

デバイス カナカ

形状 サバイバルナイフ

術式 ○○○式と一応ベルカ式

カートリッジ 拳銃のマガジンのような物をナイフの持ち手の所に入れる

装弾数 6発

魔力変換資質 電気

みんなご存知本作の主人公、基本的にめんどくさがり髪と瞳は黒で転生前と同じ

転生前は医者だった、今は闇医者をしている。なんだかんだあって現在は不老不死になっている。

特徴は死んだ魚のような濁った目をしていてその目でエロゲをしている姿はまさに廃人。
タバコとお酒とエロゲをこよなく愛する見た目二十代後半

カナカ

インテリジェントデバイス

常時展開型のデバイスで戦闘時はバリアジャケットを出すだけ。
基本的にフレンドリーなデバイス

特徴 とても丈夫

本当に今さらだけど主人公のパラメーター（後書き）

誤字脱字がありましたらお知らせください。

依頼（前書き）

かなり酷いです。

読者の皆さんからクレームが来るかも（汗）
でも文を書くのは楽しいです。

それでは第七話始まります。

依頼

俺は今あまり明るくない部屋の中に居る。そして俺の周りを目つきに悪い男達に囲まれている

勘弁してくれ……と思いつながら俺は数日前のことを思い出していた。

数日前

士郎が退院してから一年くらい経った。俺は何時も通り引き籠もってゲームをしているとケータイが鳴り出した。

「はいはい、もしもし……はい……解りました。では実際に会ってからで……」

いきなり一件の暗殺の依頼が入ってきた。
依頼内容は実際に会って話したいとのことだ。

そして約束の日、待ち合わせ場所に黒い車がやって来て乗せられてしばらくするとある屋敷に着いた。

そして今にいたる。

依頼主からの依頼はこうだった、ある家の少女を二人攫って目の前で殺してほしいという内容だった。

「まあ構わないが来るならアンタとその護衛だけでだ、仕事は全て俺一人であるから余計な真似はするな。もしこのルールを守れなかったらそれ相応のペナルティを負って貰う」

すると依頼主はニタリと笑ってわかったと一言呟いた

時刻は深夜、俺はターゲットの顔写真を見る、髪の色は紫がかついる、名前からも判るが姉妹なのだろう大学生ぐらいのほづの少女は月村忍で幼い方は月村すずか、この二人がターゲットだ。
俺はターゲットの住んでいる屋敷に忍び込んだ。

「ふう……なんだよこの屋敷」

ハッキリ言おうこの屋敷は異常だ気配が少ないと思って忍び込んでみると警備システムが異常なほど稼働している。

(国会議事堂だってこんなに警備が厳しくないぞ……)

俺はカナカに話しかけた

「カナカ、あの機械にハッキングして一時的に稼働を止める」

『了解。全機能を落すまであと3、2、1、0』

今だ、俺はまず月村すずかの寝ている部屋へ向かった、子供の方が抵抗も少ないからだ。

すぐにターゲットの部屋は見つかった事前に情報を集めて大体の目星はつけていたからだ。俺は部屋に入ると薬品をしみこませた布で口と鼻を押さえ込んだすると一瞬目を覚ましたがすぐに気を失った。

その後俺はもう一人のターゲットの眠る部屋に向かった。

そっと部屋に忍びこむと寝ていると思っていた少女が飛び掛ってきた、俺は肩に最初のガキを担いでいるから手が出せない………仕方なく足を出した。

俺の蹴りが腹に当たったようで少女は苦痛にもたえながらもこちらを睨みつけた、俺は片腕でガキを担ぎなおし空いた手で腰から拳銃を抜きガキの頭に突きつけた、すると少女は顔を青くして大人し

くなくなった。

俺はその瞬間に当身をして少女に意識を刈り取った。

暗転

私の名前は月村忍月村家の当主だ。今私は両手を縛られてさらにイスに縛り付けられている、すずかはまだ気絶しているようだ。私は状況を確認した。かなり広いが何も無い部屋に居るいる目の前には男性が立っていた。

私は睨みながら目の前に居る男性に話しかけた。

「何のつもり、私達を攫って何がしたいの」

「ん？ああ起きたのか、いやなに今回のクライアントさんの希望でね。目の前で殺してほしいって言う依頼なのよ。まあ諦めてくれや」

私はなんとなく予想していた。けど妹のすずかまで巻き込まれるのは予想外だった。

「お願い……妹だけは手を出さないで」

今俺の目の前に居る少女は小さく呟いた。

俺はその言葉に何も言わなかった。

その空間にほんの少しの沈黙が続いた、少しするとギギギと錆びた鉄が擦れる音が静かな空間を侵食したする。

俺は音のした方向にゆっくりと顔を向けると依頼主とその護衛が入ってきた。

「おおつ、すばらしい契約通り二人とも連れて来るなんて。」

男は大げさな風にそんな事を言い出した。

「依頼だからな」

忍はいきなり入ってきた男を睨み付けた。

「おおつ、怖い怖いそんなに睨み付けないでくれよ。君はこれから死ぬんだから。」

男はニタニタ笑いながらそう言った

「じゃあこれから始めますからクライアントさんは少し離れていてくださいね、血が飛びますから。」

「その事なんだがなあ……最後の方は本業の方に任せることにするよ」

男がそう言つと後ろの方から一人の男が前に出てきた。

「ヒツヒツ、ねえコレに何をしてもいいんでしょう、いいねえ壊しがいがあるよ、ねえもういいでしょう。最初はやさしく指からかなあ、それとも思い切つて眼球から？」

前に出てきた男はそういいながらバッグから色々な道具を出してきた。

「オイオイ……クライアントさん契約が違つぜ？」

航は呆れた風に言った。

「金は払うからいいだろ別にいいだろ。」

「いや……そういう問題じゃ無いんですけど……」

その台詞に苛立ったのか

「うるさいっ、金は払うと言っているんだこれ以上文句言つて来るなら……」

周りに居た護衛は拳銃を一斉に俺に向けた。

「契約破棄でとみなしますよ。ルール通りして下さい。」

「チツ、うるさい奴だな死体が増えるのは面倒だがしかた……」
ブシュツという音が響いた、するとその音の近くに居る者達が紅い雨にぬれていく。

私は確かに見ていた、彼が依頼主と呼んでいる者の護衛を懐から出したナイフで切り殺すのを。

私は彼を見ると彼はニヤリと笑った。すると私の背中にゾクリ冷たい物が走った。

「いいねえ、いいねえ。この感触人、切り殺したときの感じ。いいぜお前らのことを芸術に変えてやるよ、壊して（精神的に）バラして（肉体的に）殺して晒して（周りに）やんよ」

彼はニヤリと笑いながらそんな事を言った。

それから一方的な流れるような虐殺だったまるで優雅に踊っているような、まさに芸術だった。

「わ、わかった。この女達はお前にやるだから……」

最後まで言わずに男は死んでいった。この部屋の一杯に血がかかっている、もちろん私にもすずかにも私はこれはチャンスだと思いつきにかかった血を使って縄から抜け出そうとしたが、あまり上手くない。

「さてと、最後はこいつ等か」

俺は縛られた少女達を見た……殺すか口封じの為に。唇の端がつり上がっていくのがわかる。

少女は此方の視線に気づいたのか身体をビクッとさせた。

「マズイ、まだ縄が抜けてないのに、あと少し、あと少し、よし、ぬけたっ。」

「絶対に手を出させない。起きてすずかっ」

そう言っつて少女は妹をゆるする。

「ん？あれお姉ちゃん。どうしたのこんな時間に」

「良いから逃げてっ、こっちよ」

私はすずかの手を引いて扉を開けて外に出た。

「鬼ごっこか楽しいねえ」

と後ろから声がした。

どれくらい走ったんだろう時間の感覚がない。

「お、お姉ちゃん少し待って」

「ごめん、流石に疲れてきたよね。少し休もうか。」

私は外を見張りながら休んだ

「こんな所に居たんだ」

その声だけが不気味に響いた。

私はすすかと彼の間には立ち足はだかるように割って入った。

「残念だねえ、でもルールだから罰ゲームだ……チツ、くそが」

誰か知らないが此方に向かってかなりの速度で接近してきている、ヤバイな、それなりの実力者が複数

チツ、撤退するか……

俺は現場から立ち去った。

「え？」

私は訳が解らなかった、いきなり彼が消えたことが最初は何かの罠かと思っただけと本当にいない。

安全を確認してこの場所から立ち去ろうとしたら

「忍っ！！大丈夫かっ！！」

恭也がコツチに向かって走ってきた。

「傷は何処だ？早く治療しないと！！」

恭也はそう言っで私の身体を調べ始めた

「どうしたの恭也そんなに慌てて」

「大丈夫か忍ちゃん！？そんなに血まみれで」

言われて始めて気づいた、そういえば私全身血まみれなんだ……

「大丈夫ですかお嬢様！！」

ノエルまで……

「大丈夫よコレは私の血じゃ無いわ」

「どづいづことだ？」

皆がこっちを見る

「実は……」

「ふう……最近ついてないな」

俺は全身血まみれのまま通行人に見つからないように屋根を飛び移りながら自宅に帰った。

依頼（後書き）

誤字脱字などがありましたらご報告ください。

感想がありましたら気軽にください感想がもらえれば作者のやる気が上がります。

友人（前書き）

更新にかなりの間が開いてしまつてすみません。

少しでもこの小説を楽しみにしてくれていた人たちにお詫び申し上げます。

それではごつぞ。

友人

「スカリエッツィ、遊びに来たぞ」

陽気の声な部屋に響く

「いらっしやいませ、中村様」

「おう、久しぶりだなウーノ」

「やあ、久しぶりだねえ。いらっしやい」

いま目の前に居るのはウーノといってスカリエッツィの秘書兼助手だ、この人の身体の色つばさときたら……たまるん。そしてその父親的な存在のスカリエッツィ、本名はジェイル・スカリエッツィという、ちなみに犯罪者だ。

「なあ、スカリエッツィここ本番ってだめだっけ？」

「何度も言うけどここはそういう所じゃないよ、まあ本人の同意があれば構わないけどね」

そんな呆れた風に言うなよ……

「聞いたかウーノ、これから甘い夜を過ごそう……！」

俺はウーノの手を握って何も無い部屋に行こうとした。

「えっ、ちよっ、」

そんなやり取りを見ていたスカリエッティが

「本当にここに何をしに来たんだい？」

スカリエッティ……止めるなよ……

「ん……いやなに、最初に言った通り遊びに来ただけだよ。対戦しようぜ」

「そういう事なら最初に言ってくれば良かったのに……その後出れば娘達に訓練をしてやってくれないかい？」

スカリエッティには娘がたくさん居る、通称ナンバーズだ。

「別に構わないぜ、んじゃあまずこっちの用事を始めるか」

「わかったよ、すぐに場所を用意しよう」

「おしっ、そこだ行けっ」

「クッ、しかしまだいける」

俺たちは今機械同士で対戦をしている。

俺の作った機体は戦闘機型の方だ特徴は三段階に変形できることだ、ちなみに機体名はVF-25ヴァルキリー、スカリエッティの方の機体はガジェットドローンと言う形は様々で戦っているのは飛行型の？型と球体型の？型だ。

？型の特徴はスピードと旋回性だ、？型の特徴は攻撃力と防御力だ。

おっ、戦闘が終わった、今回は俺の勝ちだな。

「残念だったな、スカリエッティ」

俺達は歩きながら他のナンバーズたちが居るリビングに向かい歩きながら話していた。

「勘弁してほしいね、コッチは機械工学が専門なのに何で医学が専門の君に負けるなんて……」

そんなにシヨゲるなよ……

「当たり前だろ、年の功って奴だ。そんなに簡単に追いつかれてたまるかっての」

「そういえば最初に会った時も何かを作るためにか部品を買おうとしていたね」

「ああ……あのときか……」

そう言われて俺は最初にスカリエッティと会った頃を思い出そうと
していたその時

「ドクターおつかねー」

明るい雰囲気の声が響く

「セイン、みんなは如何したんだい？」

「多分洗淨の最中だと思うよ」

……な、に

「すまんスカリエッティ、俺、用事を思い出した」

「何処に行くんだい？そっちには風呂場しかないよ」

襟を掴むな、襟を

「わかった、わかった、頼むから放してくれ」

「まったく……」

呆れた顔すんなよスカリエッティ……照れるじゃないか／＼

「仕方が無い、俺が飯の準備するか、スカリエッティ、皿出して
くれ」

「わかったよ、所で今日の食事はなんだい？」

「栄養面を考えて魚系のオカズを煮物にしようかと思う」

「じゃあ、皿はコレでいいかい？」

「ああ、それで頼むよ」

「はいコレ……」

「……………」 俺

……………居たのかオットー、声ぐらいかけるよ

数十分後

「ふう……………ちっぱりした」

「気持ちよかったわね〜」

「久々に皆と風呂に入れて嬉しいぞ」

「そつつすね〜、こんなに大人数なのは久しぶりっすね〜」

「お前ら、気が緩みすぎだぞ」

「そうですね、気が緩んで居ますね」

「アタシはチンク姉と久々に入れて楽しかったぜ」

「……………」

上からディエチ、クアットロ、チンク、ウエンディ、トーレ、セッテ、ノーヴェ、ディード

あいつら上がってきたな。よし、丁度いいタイミングだし……。

「お前ら、席に着け。メシ丁度出来たから、今並べるところだ」

すると、席に着き始める

「おおっ旨そつつすね〜」

「つまみ食いすんなよ」

「流石にしないっすよ〜」

「解ってるって。あつ、スカリエッティこれ二つソッチに置いてく

れコレで最後だから」

「わかったよ」

そう言われスカリエツティは最後の皿をテーブルに置く

「それじゃあ、みんなそろったし、席について……いただきます」

「……………いただきます」

その掛け声と共にみんなが一斉に食べ始める

「美味しいね、この魚はなんだい？」

「それは鮭だよ、ご飯に一番合うと思って持ってきたんだがどうやら気に入ってもらえたようだな」

そう言つて航はナンバーズの方を見る、するとスカリエツティもつられてその方向を見るとソコには勢い良くご飯を食べているウエンデイとセインそしてノーヴェの姿があった。

「メチャクチャうまいっス」

とウエンデイ

「ほんとだよな」

とセイン

「この後も訓練があるから飯食つとかないと身体が持たないんだよ」

とノーヴェ

「そうかそうか」

そう言いながら笑う航が気に食わなかったのか

「この後の訓練で絶対ぶっ飛ばしてやるからな」

「あー、はいはい。とりあえず飯食っとけ」

「解ってるよ」

そう言っつて飯を食う手を早めるノーヴェだった。

数時間後

昼食も食べ終えたナンバーズが全員（ウーノ、ドゥーエを除く）で訓練室に居る。

そのナンバーズに対峙しているのは一人航だ。

『それでは訓練を始めるよ』

訓練室の外に居るスカリエツティから合図が来た。
するとカウントダウンが始まる

『3』

『2』

『1』

『0』

「うらああああ」

掛け声と共にノーヴェエが突っ込んでくる。

その後ろからウエンディがライティングボードで援護射撃をしてくる。いいセンスだ、だが

「甘いつ!!」

俺はウエンディの射撃をかわしながらノーヴェエの攻撃もかわし一撃入れノーヴェエが倒れる。

すると後ろから、セツテが中距離ブーメランブレードを使いトールレが近距離でラインドインパルスを使い攻撃を仕掛けてくる。

俺はその攻撃もかわしてトールレを蹴飛ばしそしてディードに近づき殴り飛ばし二人を気絶させる、残るはウエンディとチンク、クアツトロとセイン、ディエチとディードだけだが周りを見渡すが何も無い。

「ぶっ!!」

俺は嫌な予感がしてその場から飛び跳ねた、するとソコにはバインドのようなものがあつた、オットーか……しかもあいつ等の姿が見えないという事はクアットロのISシルバーカーテンが発動しているなあ……だるいわあ。

しかない……俺は目を瞑り全神経を耳に集中する

『ジャリ』

「そこだっ」

俺は地面から石を拾い音のした方へ投擲する、すると

「イタッ」

何も無かつた空間からクアットロが現れる、それを切っ掛けにウエインデイ、チンク、セイン、デイエチ、デイドが現れる。

おお、まさかクアットロに当たるなんてラッキーだな、そう思いながら俺はクアットロに接近して当身をして気を失わせる。

逃げられないと悟つたのか残りの五人が俺を囲むように散開して一斉に攻撃してくる。

俺は身体を捻りながら攻撃をかわしてまず最初にデイドに攻撃を仕掛け気を失わせる、次に近くに居たセインに当身をして倒す。すると少し俺から距離をとってチンクがナイフを投擲する。

「IS発動ランブルデトネイター」

「倒したっすか？」

煙が晴れるとソコには何も無い

「残念だったな」

俺はそう言つとチンクとウエンディの気を失わせる。

するとソコにデイドが突っ込んできた、後ろからデイエチが攻撃の準備をしているので射線にデイドが入るように移動するとデイエチが苦い顔をする。

俺はデイエチからの攻撃が来ないうちにデイドを倒す、そして残ったデイエチがなれない接近戦をしようとするが俺が一発でしとめる。

これで訓練が終了した

訓練が終わり皆がこの休憩室に集まって休んでいる

「セットアップもしてないのにやっぱり強いっすね」

ウエンディが俺に話しかけてくる

「まあな」

俺はタバコに火をつけながら相槌を打つ

「なんでそんなに強くなつたんだ」

そんな事をチンクが聞いてきた

「そりゃあ訓練をしまくって強くなったにくまってるんだろ」

「いや、そうゆう事を聞いたんじゃなくて『何でそんなに強くなるうと思っただ』って聞いたんだが」

皆がコツチを一斉に見る

「……そりゃ、俺だって男だからな。どうしても倒したい奴の一人や二人くらいいるだろ。どうだ中々漢おたくつぽいだろ」

そう言っただ航ははにかんだ。

「カッコいいっすね〜」

「だろ、惚れたか」

「いや、それはないっす」 ウエンディ

「ないな」 チンク

「ないだろ」 トーレ

「あるわけねえだろ」 ノーヴェ

「ないですね」 セツテ

「ないですね〜」 クアットロ

「ないわね」 ディード

「ないでしょ」 セイン

「あはは……（失笑）」 ディエチ

「はぁ……（溜息）」 ウーノ

「（ぼん）……」 オットー

オットーそんな慰めるような目で見ると……

「まあまあ、彼はこんな人間だったって事はもう皆知っていること
なんだから大目に見てあげたまえよ」

スカリエツティ……お前の発言が地味に傷ついたぞorz

「ま、まあいいや。もうこんな時間だし帰るわ。」

「そうかい、まだゆっくりして行って構わないのだが」

「悪いな、少しゲームが溜まってるんだわ」

「そうかい、それなら仕方が無いな」

「おう、んじゃあな」

「ではまた」

そう言って俺は家に転移した。

「ぶっ思っ」

突然チンクが口を開いた

「ぶっって?」

他のナンバーズはチンクが何を言っているのか理解できてないようだ

「さっきの質問の答えだ。一瞬だが答えに間があった」

「そこまでだよチンク、彼にだって秘密の一つや二つはあるんだから」

「さて、それでは今日の訓練のデータまとめるるかウーノ」

「はい、ドクター」

そう言ってナンバーズ達は研究室の奥に消えていった。

友人（後書き）

戦闘シーンって書くの大変ですね。書くのにかなり時間がかかりました。

誤字脱字などがあったらお知らせください。

感想などが貰えたら作者のやる気が上がります。

依頼……あれ？このタイトルどこかで（以下略）（前書き）

今回は戦闘シーンに色々苦戦しました

それではどうぞ。

依頼……あれ？このタイトルどこかで（以下略）

それは俺がスカリエッツィの所から帰ってきて数日経ったある日のこと

時刻は深夜……とは言わないがそれなりの時刻

「はぁ、はぁ、マナちゃんハスハス」

俺はPCゲームに華を咲かせていた。

そんな中ケータイから鳴り響く電子音……

「あー、あー、聞こえない」

と、取り敢えず無視の方向で……

今だなり続ける電子音、電子音、電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音電子音

「ああ、もう、ウルセエッ」

俺はケータイを手に取り「ピッ」という音と共に……切った。するとデバイスの方の連絡機能が働いた。

『マスター連絡だよ、相手は……あれっ、誰だかわからない』

「なに、本当か？」

相手が判らないとなると……アイツかあ……

俺はケータイを手に取り『ピッ』っという電子音と共に耳に当てる

『おー出た出た。いやあ久しぶり』

「……何の用だ？」

『いやあ、君も解っている通り。僕がこうして君に電話するということは僕達上位種にとってよろしくない事が起っているんだよ』

「……用件を言え」

『ああ、実は三匹ほどその世界にコッチのある生き物が逃げ出してねえ……排除して欲しいんだよ』

「……わかった」

コイツはごく稀に俺にこうした依頼を頼むときがある。

『その生物の現在地とこれから行くであろう予測地点を送るよ』

「わかった。そいつはコッチで処理していいんだな」

『ああ。悪いね、報酬には色を付けて払っておくから』

俺は急いで装備の準備を始める

まず腕に鎌爪状の装置、リストブレードを取り付ける、そして肩にはシヨルダー・プラズマキャノンを取り付ける、その他にも色々な

装備を腰などに取り付け、最後にマスクを取り付ける。
その姿はそう皆ご存知プレデターだ。
ああ、忘れていた。あとカナカも腰にさす

そして俺は自宅を出て民家を飛び乗りながら例の生き物が居るとされるところに向かった。

私の名前は月村すずか。隣に居るのは私の友達のアリサ・バニングス、同じ学校の友達です。

私達は今倉庫みたいな所に連れて来られています。友達のアリサちゃんと一緒に学校から帰るときに突然襲われてここに連れて来られました。

私達を誘拐した男の人たちは家から身代金を取るうとしているみたいです。

そんな事を考えているとアリサちゃんがいきなり男の人たちに怒鳴りました。

「アンタ達、こんな事をしてタダで済むと思ってんの」

「あ？ウルセエよ、クソガキ」

男の一人がそういう

「アンタ達この日本で誘拐をして逃げ切れると思ってんの、そんな事出来る訳無いじゃない。馬鹿じゃないの」

するとその口調にイラついたのか

「なあ、このガキ共殺してもいいよな」

さっきの男がいう

「まあ、身代金を取ったら殺すし大丈夫だろ」

仲間の一人もいう

「オーケー、じゃあ俺はこのクソムカつく金髪のカギを殺すわ」

そう言つて男は拳銃をアリサの頭に突きつける。

「じゃあ俺はコッチの紫の髪のカギを仕留める」

「そつだ。最初にその紫髪のカギを殺してやろうぜ、このガキの目の前で」

「えっ。や、やめてよ。お願い。やめてっ!!」

アリサはいきなり言われた事の意味が解らなかった。

「お前のせいでこの友達は死ぬんだよクソガキ」

男はアリサの顔に唾を吐きつける

「謝ったら考えてやよ」

「す、すみませんでした」

アリサは震えながら謝る

しかし男は

「あ？聞こえねえよ。ほら、ちゃんと『調子に乗ってすみませんでした。これからは二度と調子に乗りません。どうかこの愚図な私を許して下さい』だろ」

「ちょ、調子に乗って、す、すみません、で、でした。」

アリサは目に涙を溜めながら言われた事を復唱する。

「ほら、まだ続きがあんだろ、早く言えよ」

「こ、これからは二度と調子に乗りません、ど、どうかこの愚図な私を許して下さい」

ついに涙をながしてしまふアリサ。そんなアリサを見ながら男達は笑う

「しょうが無えなあ」

その言葉にアリサはほっと胸を下ろすが次の瞬間その期待は崩れ落ちる

男はすずかの頭に拳銃を突きつける。

「えっ、なんで？ちゃんと謝ったのにつ」

アリサは叫ぶように言う

「嘘に決まってるだろ、ばあーか」

そう言いながら男はアリサに平手打ちをする。その行為に男達は笑う

「っっ」

アリサの頬は赤く腫れてしまう

「じゃあな、ガキ」

そう言い放ちすずかの頭に拳銃を突きつける。

すずかは目を瞑る。アリサも次に起るであろう凄惨な結末に目を瞑る

そして

銃口から

パンと

言う音が鳴り響く

アリサは、おそろおそろ目を開けるとそこには無傷なすずかが居た。良く見るとすずかも何が起ったか解らないようだ
しかし、逆に男共はうるたえる

「何があったっ！！返事をしろ！！」

しかし無線機から聞こえてくるのは悲鳴だった

「うるたえるな、コッチには20人居るんだぞ、各自4人ずつで小隊をつくれ」

しかし確実に人数が減っていく

鳴り響く銃声と悲鳴、気がつくとも男達の人数は10人に減っていた

「ぜ、全員一箇所に固まれっ」

『ガッ、ガッ』

何かが倉庫の扉に体当たりをしている音、男達はそちらに一斉に銃を向ける

『ガッ、ガッ』

そして、ついにバキンと扉の鍵が壊れる音がする
扉がゆっくりと『ギィィィ』という金属が軋むような音を立てながら開く

男が大きな声を上げる

「う、全員う、て　　がっ、ふ」

男の胸から黒い槍のようなものが映えていた。

数分程前

俺は例の予測地点に来ている。しかしソコにはこの間誘拐した月村がいた……誘拐され過ぎだろ、警備どうなってんだよ……
しばらくすると、銃声が響いた、俺はマスクの機能をサーモグラフィモードから別のモードに切り替えると、そこには……

「おいおい、マジかよ」

思わず声に出してしまった。まさか狙ってやったんじゃないだろ
うな？

ソコには

黒く

長い頭を持ち

槍のような尾を持った

エイリアンがいた

「う、全員づ、て　　がつ、ふ」

全員がその胸から生えた槍のような尾を凝視していたそして

「シャアアアア」

エイリアンの声を聞きようやく男達はわれに返った

そして全員が銃を撃ち始める、しかしそれを嘲笑うかのようにエイリアンは弾丸を避ける

すると、壁が思いつきり吹き飛ぶ、するとソコには2体のエイリアンがいる

「な、何なんだよつ、この化物たちはあああ」

そう叫びながら絶命していく男達やがて最後の一人になる、男達を殺し終わるとエイリアンは殺した男達の肉を貪り始める。

もう、ソロソロだな肉を食わして安心させた所を仕留める……3、
2、1、今だつ

俺は一番近くにいるエイリアンにスピアを投げつけるすると頭に命中して絶命した。

ほかの2体も異常に気づいたが少し遅かったネットランチャーを射出して1体の動きを封じてもう1体をプラズマキャノンで仕留める。そして動きを封じられたエイリアンにどんどん食い込んでいってる、俺は腰から刃が六枚付いている収納式のブーメラン「シユリケン」を残りのエイリアンに向かって投擲する、すると頭を縦に裂きエイリアンを絶命させる

俺は腕に装着してある「コンピューター・ガントレット」と呼ばれるあらゆる装置の制御システムを使い光学迷彩を解いた。

そして俺はエイリアンの死体に溶解液をかけるするとエイリアンの身体が解けていく、そしてもう一体のほうにもかける、残りの一体は研究のために持ち帰るために残しておく。

えっ、何が起こったの。アタシ達は誘拐されてそれからすずかを殺されそうになって、そしたら黒い化物が出てきて誘拐した人たちを殺していつてそしたらまた変な化物が化物を殺していつて……何コレ訳が分かんないわよっ！！

すずかの方を見ると同じような顔していたし、するとすずかがいきなり大きな声で『あぶないっ！！』って叫んですると化物のいた場所にはさっきの黒い化物がもう一体いた。

あ、あぶねえ。確か3体って言ってたよなアイツ。

何だよあのエイリアン他の奴より明らかにでかい二周りくらいでかいぞ……

しかも他のより賢いし、サイズからみてアイツがリーダーだし。手下に戦わせて様子を見ていたって所だな。勘弁してくれ……

俺はスピアを腰から取り出しエイリアンに近づき頭を狙うがかわされる。

すると尻尾の先端部分で此方を刺そうとするがその尻尾を掴み振り回し投げつけるすると、それなりに効いたのか『ギイイ』と苦しそうな声を出す。すかさず俺はプラズマキャノンで追撃をすると辺りに煙が立ち込める。

俺はマスクの視覚モードを切り替え仕留めたか確認するがソコには居なかった。

周りを確認すると何処にも居ない……一瞬逃げたかと思ったが天井から『シャアアア』と声を上げながら飛びついて来るがそれを寸前でかわかしたとがプラズマキャノンが破壊される、俺はエイリアンにスピアを投擲するがかわされる、しかしそれでいい俺はすぐに近づき腕のリストブレイドを出しエイリアンの頭を貫く、するとまだ死ななかったのかインナーマウスを出して攻撃しようとするがその抵抗もあえなく絶命する。

俺はさっきと同じように溶解剤で片方のエイリアンを溶かしデカイエイリアンを持ち帰るための準備をする、ココに連れて来られたガキを殺そうか迷ったが助けてもらった礼もあるし見逃すことにした。

数分後

「……アリサちゃん、すずかちゃん大丈夫かいつ?」「……」

高町家と月村家が急いで救出に来たがソコには無残に殺された男性の死体と震える二人の少女がいた。

俺は屋根と屋根を飛び移りながら帰る……のもダルイから普通に道路を歩いてかえる、すると……

「なんだコレ?」

『猫だねマスター』

そう、猫だ。しかもかなり衰弱して死に掛かっている

「そんなの見りゃあ判るんだよ……てか今回始めて喋ったな」

『マスター、あまりそういうメタな発言しちやだめだよ』

うおう、デバイスの癖に生意気な……

「わかった、わかった。よし、コレもって帰るか」

『もって帰ってどうするの?』

「食べる」

『ええっ!?! た、食べるのっ?』

「おう。猫はまだ食ったことないし、美味いって聞くからな」

『はあ…………』

機械がため息をつくなよ…………

俺は死に掛けている猫を持ち自宅に帰った。

しかし俺は気付かなかった、俺がこの時重大なミスをおかしていることに…………エイリアンの血液が一滴一滴がゆっくりと滴り落ちていくことに

俺は自宅に無事に着きエイリアンの死体を腐らないように保存液に居れその後、猫を台所の食材置き場に置いて来て上位種のアイツに文句を言い終わり部屋でゲームをしていると異変を感じた、変な気配が屋敷の敷地に入り込んでいた。

俺はすぐに武器のカナカを腰に挿し大太刀も脇にさして侵入者の気配のする方へ向かった。

「はい、ストップだ少年、いやこの場合は青年か」

「んなつ」

俺が行き成り現れたのに驚いたのか青年は驚愕していた。

「ここから先はっつーかここは私有地だぞ」

「……………」

俺が言った内容が判ってんのかコイツは無言を決め込む

「っー訳でさっさと出て行け」

「それは出来ない」

「ああ？君さあいい加減にしないとお兄さん怒るよ」

それでも帰ろうとしない

「おいクソガキ出てけ、さもないと殺すぞ」

「何だとー!!」

俺は脇に挿した大太刀を抜くとガキも刀を抜いてきた。

ほお……サイズは脇差よりは長くて一般的な刀よりは短い……恐らくはスピード系の戦い方だろう。

俺はガキを殺すために踏み「少し待ってくれないか」

ん？

そこに居たのは土郎だった

「よお、久しぶりだな。ちょっと待ってな、このガキを殺してからでいいか？」

「コイツは私の息子なんだよ、勘弁してくれないか」

「と、父さんっ……!」

「マジで？コイツがお前のせがれなのか。プツ、ククク、プアツハハ。冗談だろ」

「いや本当だよ」

「恭也っ!!」

奥から女性が出てきた……どこかで見たことがある様な……誰だっけ?

女性が俺に気付くと急に怯え出した……ああ、月村の当主だ。

「恭也、士郎さん逃げてっ!!」

「どうしたんだ忍?!」

「そうしたんだい忍ちゃん」

「いやあ、嫌われたねえ」

「貴様っ忍になにをしたっ!!」

「いやなに、少し前に色々有りました」

説明中

「そんな訳でいまに至るんすよ」俺

「はあ、判ったその事に付いては不問にしよう」

「父さんっ!!」

「それは良いとして、すずかちゃんやアリサちゃんが見た化物というのどついう事なんだ」

「なぜその事を知っている?」

「血液みたいな跡を追ってきたらココについた」

「まあ、私の場合は恭也に聞いてココに来たんだが」

「判った。アレはある筋の依頼で殺害または捕獲という事で向かったんだが……」

説明中

「と、言うわけである人型の化物は俺だから気にすんな」

「わかったよ。それじゃあ今晚はもう遅いから帰らせてもらっしょ。行くぞ恭也、忍ちゃん」

「おう、んじゃあな」

そう言って士郎達は帰っていった。

「ふう……」

ようやく終わった、さてと家に入りますか…… 晩飯はダルイシカツ
プ麺でいいか……

そんな思考をしながら航は自室に入ってしまった。

依頼……あれ？このタイトルどこかで（以下略）（後書き）

誤字脱字などがありましたらご報告ください。

感想などが貰えたら作者のやる気が上がります。

ペットを拾った……え？違ってます？（前書き）

祝、PV20、376アクセス

たくさんの方に見ていただいております。これからも頑張っていくのでどうかよろしく願います。

何時も通り特に意味の無いタイトルです。それではどうぞ。

ペットを拾った……え？違ってます？

私の名前はリニス、使い魔です。私の主はプレシア、プレシア・テスタロッサです。私はある日突然使い魔にされました。別に使い魔にされたのが不満というわけではありません。私の役目はプレシアの娘のフェイトに魔法などの教育をすることでした。フェイトに魔法を教えるの事に付いては問題はありませんでしたフェイトは物覚えも良く理解も早い、そして最近アルフという使い魔もできて楽しそうにしている……問題があるのはプレシアの方でした、プレシアはフェイトと話すことをほとんどしませんでした……それでもフェイトは頑張って褒めてもらう為に頑張っていました。

けど、ある日私は知ってしまいました……プレシアの秘密を私はプレシアを説得しようとした、けどプレシアに話した瞬間プレシアの影からナニカが出てきましたそしてソレは私に向かってニヤリと笑って言いました。

『コイツはもう要らないな、そうだろプレシア

……』

プレシアは何も言わない、私はプレシアに向かって話しかけようとしません

(プレシアっそれから離れてっ)

けど声になって届いてはくれません

ソレはこちらを見てもっとニタリと笑います。

『お前は邪魔だ時と空間の彼方へ消え去れ』

ソレはそう言うとき突然空間が避けて私の身体が吸い込まれます。
薄れ行く意識の中リニスは願った。

プレシアの事そしてフェイトのことそしてアルフの事を……

リニスは目を覚ました。

周囲を確認する……温かい日が射しているそこはキッチンだった。
なぜ？どうして？という疑問が頭をよぎる……すると『ガチャ』と
音を立て扉が開いた。

「ふあゝ、腹へった」

ソコにはあくびをしている一人の男性がいた。
目が合った……

「え？」

男性の口から漏れた声が静かなキッチンに木霊した気がした。

数分前

「んあ？もう朝か……」

俺は目を擦りながら時計を見る。げっ、まだ朝の9時かよ……もう少し寝よ……

「ぐう」と腹の虫がなる

「メシ喰ってから寝るか」

俺はカップ麺が置いてある台所に向かって足を進めるとソコには裸の女性が居た。

「え？」

思わず声に出してしまった。取り敢えず扉を閉めた。

「だれお前？」

俺は扉を開けてこの女に問う、すると女は答えた

「ええと……私はリニスといいます。使い魔でしたが事情がありまして契約が終わったんですけどこのお屋敷の中の魔力素が濃いおかげでこうして姿を保っていられるんですが取り敢えず助けていただいてありがとうございます」

女は丁寧に礼を述べる

「使い魔？……ああ、守護獣ね……。まあいいや、取り敢えずお前服着ろ」

そういわれてリニスは初めて気が付く、自分が何も来ていない事に

「すみません、魔力が無くて服が作れないのです……」

そう言うと航は手を前にかざし魔力を集める、すると……

「コレでいいだろ」

「えっ？えっ！」

リニスの身体が光に包まれ服が出来る

「魔力をお前に譲渡したただけ……特別な事はしていない」

リニスは驚愕した、デバイスも無しに魔力を譲渡するなんてとてもじゃないが普通ではなかった

「あつ、あの、お願いがあります」

リニスを決めた自分の主を救ってもらう事を、助けて欲しいという事を

「ん？わるい、後でいい？今腹が減ってて……」

そう言うと航は棚からカップ麺を取り出しお湯を入れソレを部屋に持っていく、それに付いて行くリニス

数分後

93

メシを食べ終わった航にリニスは向かい合っていた。

「で？さっきお願いがどうか言っていたな？」

リニスは心を込めてお願いをする。その気持ちは航の心に

「ええと……彼方にある人を助けていただきたいんです」

「いやだ」

届かなかった。しかも即答

「お願いしますっ」

「いやいや、何で俺がそんなメンドイことしなきゃいかんの？」

「えっ？」

「せめて報酬をよこせよ」

しかしこの時リニスは払える物もお金も持っていなかった。いきなりこの様な場所に跳ばされたのだから当然である

「何でもします、だからお願いです。プレシアを助けてください」

何でも言われ航はリニスの体を見て唇を舐める

「何でも言ったな」

「はい」

リニスは航の目を見て真剣に答える

「じゃあ、報酬は……………お前をよこせ」

そう言われリニスは一瞬肩を震わせる

「はい……………」

「契約成立だな」

「まあ、よろしく」

と航が手を差し出すとリニスも手を差し出す、すると一瞬周りが光る

「えっ?」

「えっ?」

二人とも何が起こったか理解できないようだ。しかしリニスが何かに気付く

「あっ、あの、使い魔契約がされて、その、魔力が供給されています」

「まじか……」

ダルそうに言う航。その瞬間『ぐっ』と可愛らしい音が部屋の中に響く

「あっ、あの、これはっ」

リニスが顔を赤くさせながらなにかを言おうとする

「腹減ってるのか? 食いモンはさっきの所にあるから適当に食っていいよ。行き方はわかるな?」

そう言うと航はパソコンに向かい始める

「あっ、あの、ありがとうございます」

そう言ってリニスはキッチンに向かっていった。

これが航とリニスの出会いの始まりだった。

ペットを拾った……え？違ってます？（後書き）

誤字脱字等がありましたらご報告ください。

あと、感想が貰えたら作者のやる気が上がります

次の日（前書き）

ついに原作突入！！

それではどうぞ。

次の日

あの後、リニスに色々この世界の常識（魔法文化が無いこと）等を教えておいた。

俺はリニスにマスターと呼ばれるようになった。何故かって聞くと使い魔の契約をして俺がリニスの主になったかららしい。

まあ、そんなこんなで今はこの家で使用人みたいな感じで暮らしている。最初は身体を報酬などと言っていたのでそういう行為をさせられると思っていたみたいだったらしく若干俺に怯えていた……仮にもマスターに失礼だなあおい、それにソレがしたいならそういう店に行くかナンパしてお持ち帰りするから。

次の日

「起きてくださいマスター」

身体が揺すられる

『マスター起きて朝だよー』

カナカの声がする……もう一人は誰だ？

「んあ？誰だお前……ああ、リニスとカナカか……」

やべえ、マジで一瞬忘れてた

リニスには昨日カナカを紹介しておいた。まあそれは良いとして

「どうした？」

「もうお昼ですよ。昼食を作りましたから食べてください。あっ、勝手に冷蔵庫の中を使っちゃって拙かったですかね？」

そういわれて気付く、家の中が美味そうな匂いで充満していることにあの冷蔵庫の中身から作ったのか、中にたいした食材は入っていなかったんだがなあ……

「いや、別に構わん」

俺はリビングに向かおうとしたがリニスに顔を洗ってこいと言われ顔を洗った後にリビングに向かった。

おお。すごく美味そうな食事がソコにはあった。

俺はすぐに席に着き

「いただきます」

と言いメシを食おうとするとある事に気が付いた

「お前は食わないのか？」

「いえ、マスターの食事が終わった後にいただきます。それに従者が主と一緒に食事を食べることなどありません」

「……お前も一緒に食え」

「あの……私が言っていた事聞いていました？」

「聞いた、いいから食べ。もし断るならマスターとしての命令で食わせるぞ」

「……判りました」

そう言うとりニスは渋々というような顔で一旦キッチンの方に行き食事を取りに行った。

リニスが戻ってきて一緒に食べているとりニスが唐突に聞いてきた。

「そつえばマスターはどのような仕事をしているんですか」

その瞬間、世界リベンクの時間が止まった。

『……あ、あははは』

カナカから苦笑いが聞こえる

「あ、あの、何かまずい事を聞きましたか？」

「いや、別に問題ない。仕事は特にしていない」

「え？じゃあこの屋敷はや生活は如何しているんですか？」

リニスは若干焦りながら聞いてくる

「貯金とかはそこそこ在るし生活には問題ない」

これは本当だ、あの上位種の依頼で俺の口座には十億円が振り込ま

れていた。

「それにアルバイトもしているし」

「ア、アルバイトって……」

そんなに呆れるなよ

そんな雑談をしている仲ケータイが鳴り出す。

「はいもしもし」

「マスター 食事中に携帯は……」

リニスが何か言おうとするがそれを手で制する

「ああ、いつもどうも。はい判りました、それでは何時ものところ
で」

「誰から電話だったんですか？」

「一時間後に仕事だ、お前も来るか？」

「いいんですか？」

「別に構わん……とゆーか来い」

「判りました」

こうして俺たちはさっさと食事を終わらせて待ち合わせの場所に向かう、すると……………

「動くな」

と黒い服を着た男から言われた、しかも後ろから硬いナニカを突きつけられて……………倒すのは簡単だけどなあ……………お得意様だしマズイよなあ

「マ、マスターっ?!」

リニスは焦りながらコッチに話しかけてくる

「判ってる、俺は依頼でココまで来た。今回はずいぶん荒っぽいねえ、そんなにまずい状況なのかい？」

「うるさい。今確認を取る、少し待っている……………」

すると男は携帯を取り出し確認を取る。すると……………

「確認が取れました。どうぞ車に御乗りください」

と男が言うと黒いリムジンがやって来てドアが開く、俺とリニスが乗ると

「お飲み物はなにがよろしいでしょうか？」

「じゃあ取り敢えず酒で、飛び切り強いので。リニスは何がいい？」

「わ、私は結構です」

仕事で酒を飲むと思っていなかったのかリニスは一瞬答えに詰まる

「あと数分で目的地に着きます」

と黒い服を着た男性が言うと、おうと返事が返ってくる

「ところで何で今回はこんなに警戒が嚴重なんだ？」

「それは……先生この事は他言無用でお願いします。」

というと男はリニスの方を見る、すると

「リニスお前も誰にも言うなよ」

「わかりました」

すると男はゆっくりと口を開く

「実は数日前に組長が襲撃されまして……しかも敵対グループがまだ解らないので……」

「なるほどそれで警備が嚴重でこの車にも色々仕込まれているのか……」

すると男はどうしてソレをと言う顔でこちらを見てきた

「タイヤのへこみ具合やエンジンの音で判るんだよ……」

「流石、組長が認めた方です」

と言い頭を下げてきた

すると運転手こちらを鏡越しでこちらを覗いてきた

「着きました」

そう短く言うと運転手はドアを開ける

すると奥にある扉から黒い服の男達が一斉に出てくる

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「おう、おひさ〜」

「マ、マスターは本当に何をしているんですか？」

「あれ？言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてませんよ……」

「そっか……医者だよ医者」

「村内のおやつさん……結構傷ヒドイね……もう50になるんだから無茶しちゃ駄目だぜ」

実際に傷を見てみると酷かった……体のあちこちに銃弾を浴びていた……、ソレを俺は一つ一つ摘出していく……

「わざわざすまんな先生……でも先生も知っても通りこの業界は舐められたら終わりですから……」

そう、この目の前にいる男性は村内組と言う組の組長なのだ

「いや舐められるも何も、いきなり襲撃を受けたんだろっ？」

「ご存知でしたか……お恥ずかしい限りで……」

ところで、と続ける

「あちらの女性は先生のコレですかい？先生も隅に置けないですね
え」

と言いいリニスの立っている要る方を見て小指を立ててくる

「違いますよ、ただの助手ですよ」

と言つとおやつさんは

「ソレでしたらこの後どうですか一杯それに女も呼びましようか？」

「いいねえ、それじゃあコレが終わったらご相伴に預かろうか」

「それでしたら、お前達今日は先生が夕食を食べていかれるそうだ準備をしろ」

「ご夕食までスミマセンね……」

「いえ……何時も先生にはお世話になっていますので」

「よし、コレで全部摘出できましたよ」

「何時もスミマセン……先生」

「気にしないでくださいよ、それにこちら報酬もちゃんと貰っていますし」

「夕食が出来るまで部屋で休んでください、夕食が出来上がればウチの組の者に呼びに生かされますんで。その後は好みの女を選んで頂ければ三十分以内に呼んできますんで」

そう言つて部下を引き連れて出て行つた

「それではお部屋までご案内させていただきます」

そう言われて連れて行かれたのは二十畳くらいの和室だった。布団などが置かれている

「それでは夕食が出来る頃に呼びに来させていただきます。」
「ゆっ
くりと」

そう言っつて案内の人は出て行つた

「んじゃあ、俺寝るからリニスもくつろいでいて良いよ。それじゃ
あお休み……」

「えっ、ちょ、マスター……、はあ……もう寝てしまいましたか」

「んああ……俺どれ位寝てた？」

目が覚めるとすぐ横にリニスが座っていた

「大体四十分くらいです」

俺はそうかと相槌を打ちタバコに火をつける

「あの、マスター一つ聞きたいんですけど」

「ん？何だ？」

「マスターは何時もこのような仕事をしているんですか？」

「まあ偶にな……そう何度もある様なことじゃないけどな……」
すると

「夕食の準備が出来ました」

「おう、今行くわ」

俺たちが行くとソコは若干宴会ムードだった

「先生どうぞそこにお座りください、助手の方もどうぞ」

そして周りは静まる

「それでは乾杯の音頭をさせていただきます……組長の全快を祈つてそして先生に……乾杯!!」

「……」
「乾杯」「」「」「」

しかし突然ふすまが開く

「村内組の組長アンタの命たまもらったああああ」

と叫びながら数人の男達が乱入してくる。そして組長に向かって銃を向けて撃とうとする

「チッ」

俺は腰から投げナイフを取り出し乱入してきた男達の手に向けて投擲する。

すると男は痛みで拳銃を落とす、するとすかさず俺は乱入者たちの肩の関節を外す

「ふう……大丈夫かいおやっさん？」

「す、すみません。組のいざこざを持ち込んで……」

組長が頭を下げてる

「気にすんな、ソレよりこいつらは如何する？」

「こちらで処理しておきます。多分こいつらは先日襲撃してきた組織の者達だとおもいます……」

「そうか……それじゃあ俺たちはお暇するわ」

「本当にすみません……このお礼は必ずしますので……」

「おう、帰るぞリニス」

「はっ、はい」

「せめて車で送らせてください」

根は優しいんだよなあこの組長……

「いや、大丈夫だ。気持ちだけ貰っておくよ」

俺とリニスは商店街に寄って晩飯の材料を買って帰宅した。

晩飯が終りリニスが話しかけてきた

「マスター、お願いがあります。私に修行をつけてください」

リニスは先ほどの事を見て素直にすごいと思ったのだ。魔法も使わずにあの速さ……航は少し考察して答えを出した

「別に良いよ。その代わりかなりキツイぞ」

「はいっ」

「それじゃあ明日から修行を始めるからな」

「解りました」

「んじゃお休み」

こうして部屋に戻った

「ん？何だこの魔力の流れは？」

少し遠くのほうで魔力の流れをじる……しかもかなりデカイ。念の為に見に行くか……

カナカを腰に挿し俺は窓を開け飛び立った

するとソコには

「何だありゃ？ロストロギアだな……タイプはエネルギー結晶型か……」

ソコには少女がいた、しかもフレットかありゃ？

そしてそいつらと対峙する様にいるエネルギー結晶体の実体化したようなヤツ……

おっ、丁度終わったみたいだな……少しつけてみるか

なるほど……あのエネルギー結晶体はジュエルシードって言うんだ……しかも二十一個あるのか……勘弁してくれ

まあ、帰るか……

次の日（後書き）

誤字脱字がありましたらご報告ください。

あと感想が貰えたら作者のやる気がアップします。

決闘？いや俺そんなキャラじゃないし……（前書き）

ようやく十二話が出来ました。

それではどうぞ

突然ですがテストが近いので二週間は更新できなくなります。
たくさんの方にご迷惑をかけます。

決闘？いや俺そんなキャラじゃないし……

俺は今リニスに攻められてる……エロイ意味ではなくそのままの意味で……

理由は簡単、この間リニスが稽古をつけてくれと言って来たからだ

「やあっ」

リニスが俺に魔法で攻撃をしてくる……俺はソレをいなしながらリニスに接近して行くと、射撃系の魔法を使うのをやめて自己ブースト系魔法を使い近接戦闘に持ち込んで来るしかし、近接戦闘ではやはり此方に一日の長があり段々押されていくリニスそして体力の限界が来たのか動きが遅くなる

「ハッ」

そして俺はリニスの身体に一撃入れてリニスを倒す、すると体力が丁度尽きたのか気絶して地面に倒れこむ。俺は自宅の庭（結構と言うかかなり広い）にかけた訓練用の結界（騒音や魔力を外に漏らさないヤツ）をとく、そして俺はリニスにタオルを投げつけ自室に戻る

「ふああ」

大きく俺は伸びをするついさっきまでシャワーを浴びていたの上半身は裸で下半身はベージュ色のズボンをはいて家を徘徊している

「おっ、あつたあつた」

俺は冷蔵庫から酒を取り出し一気に飲む。すると行き成りドアが開く

「ちよつとマスター置いていくのは流石に酷すぎます。流石に人としての人格を疑いますよ?」

と言ってくる

「いやだつて俺ニートだし……」

何言つてんだコイツ……いい歳して……

「何を言つてんだ見たいな顔しないでくださいよ」

あー、なんかうるさいなあ

「解つた解つた、今度から気をつけるから」

「あー、そつだ俺コレから少し出かけるから」

そつ言つて俺は支度をする

「解りました。何時ぐらいに帰ってきますか?」

「あーそんなに遅くないと思うから」

「解りました」

そつ言つて俺はTシャツの上にロングコートを羽織つて出かけた。

俺が家を出てしばらく経った

今俺の目の前にあるのは高町の表札

俺はインターホンを鳴らす……すると

「はい」

中から士郎が出てきた

「よう」

「……道場に案内する、来てくれ」

「ところで今日は平日だけど仕事は良いのか？」

「今日は休みにしたよ」

「そっか……」

俺が着いていくとソコにはかなり立派な道場があった

「なんだこりゃ？おい士郎聞いてないぞこんなの！！」

「すまないね」

「なんでこんな雑魚がここに居るんだよ……」

「なんだとっ！！」

そこに居たのは高町士郎の息子の高町恭也や月村家の当主や使用人がいた

「で、教えてもらいたい……あの怪物は何なんだい？」

その質問に周りが息を呑み此方を見る

「……ある場所から逃げ出した生物だ……殺害及び証拠の隠滅が俺の仕事だったそれ以外は詳しい事は俺も余り知らん」

すると士郎は静かにわかったと言った

「で、なぜ忍達を狙った!？」

士郎の息子が怒鳴ってくる

「いや、依頼だったから……」

その言葉についに堪忍袋の緒が切れた

「キサマっ」

そう言つてこちらに殴りかかつて来ようとするが、俺はそれを避ける……だって痛いじゃん……でもなんかイライラして来た

「おいクソガキ、あんまし調子に乗るなよボコるぞ」

「なんだとっ!! やつてみる」

それはまさに売り言葉に買い言葉だった

しかし、

「悪いがだめだ」

「父さん!!」

うわぁ……そりゃあないよ、しらけるわー

「俺は別に構わん、なんならソコのヤツらも入れて良いぜ」

「……わかった。しかし危なくなったら止めさせて貰うよ」

「オツケー、それじゃあお前らは真剣で良いぜ、俺も本気で行くから」

お互い構える、恭也は小太刀を構え忍は近接戦闘に持ち込むために腰を落としメイドは身体が機械で出来ているのか武装を構える、対して航は構えない……

「それでは両者……始めっ!!」

その言葉と共にまず恭也が駆け出し刀を使い一刀両断しようとするがコートを翻しながら避けられるその後忍が後ろから近づき攻撃する、しかしその攻撃もひらりとかわされるそして少し離れたところでメイドが拳銃を撃ってくるがソレもまたかわす、そして航は一旦距離をとりそこに居た全員に聞く

「まだやるか？」

その言葉に怒り心頭の恭也達、そして攻撃しようとして駆け出そうとするが

「それまでっ!!」

その言葉が道場に響き渡る

「な、なんでだよ父さんっ!!俺はまだやれるっ!!」

「本当にそう思つか恭也……それと忍ちゃん達も？」

その言葉の意味が解らないのか二人がキョトンとしている

「いいかい、もし彼が本気なら恭也達は……五回は死んでいる」

「何でだよ父さ　　ッッ」

一瞬首筋に痛みが走る、触って見ると血が着いている、忍達をみると確かに薄っすらと首に切り傷がついている

「ソレが証拠だ、彼はお前達に接近したとき首を五回も浅く切りつけたんだ」

「なっ
」

恭也は驚愕する……何故なら彼は、いや彼達は自分が切り付けられた瞬間が見えなかったからだ。いや切り付けられた事すら判らなかつたからだ

「まあ、私も微かに見えたただけだね」

「流石に士郎には見えたかあ」

「さつきも言ったが、ほんの少しだよ。でだ私と手合わせして見ないかな……」

「戦士としての血が騒いだか？」

「ハハハ……、恥ずかしい限りだがね……」

恥ずかしそうに頬を指でかく

「まあいいぜ。そういえばお前とは一回も手合わせしてなかったもんな」

そついいながら両者は位置に付く

「獲物は真剣でいいだろ、お互い寸止め出来るだろうし」

「かまわないよ」

「それじゃあ父さん俺が審判する」

「それじゃあ頼むよ」

「それでは……始めっ!!」

その瞬間両者が一気に駆け出す、一方はコートを翻しながらそしてもう一方は小太刀を携えながら

一瞬何も無い空間から火花が散る、余りに速過ぎて誰もが何が有ったのか解らなかった、しかし二人には見えていた刃物と刃物がぶつかる瞬間を

「やっぱりそのコート自体が薄い刃物なんだね」

「気付いたか、あんまりネタをバラすなよ、ネタがばれた手品師ほどしらせるもんは無いからな」

「すまないね、と士郎は言った」

「けどまだ本気じゃ無いだろ」

「お互いに様だろ、本気で来いよ」

「ああ、そつだね」

その瞬間道場の空気が変わる、否、変質した。

次の瞬間士郎は消えた様に見えた、それも否。消えたように見えた

のだ。

あれが父さんの神速……俺じゃあ目で追えない見えないと彼の息子である恭也は思った。

しかし、次の瞬間、金属音と共に士郎はあらわれた

「あつぶね、士郎……お前、薬品使ってないよな？」

「薬品ではないよ、まあ似たような物ではあるけどね」

「ああ……なるほど、脳のリミッターを外してんのか」

「なにもしていないで攻撃を受け止めている君も普通じゃないよ……」

「気にすんな、ただのヒキコだ。それじゃあコッチも本気で行くか

……」

その瞬間、士郎は跳んだ、いや飛ばされたのだ

「な、なんだいその技は？」

「秘密だ、この戦いが終わったら教えてやんよ」

「そうだね」

その言葉と共に二人はまた駆け出す

「あつはつは、いやあ強かったねえ、まいったまいった」

いま俺は土郎の家でコーヒを頂いている。

まあ要するに、手合わせは終わったって事だ、結果はだって？まあ俺が勝ったよ

「まあ、知り合いにも言ったが年の功ってヤツだ、こう見えても俺はお前達よりかなり年上だからな」

「「「えっ？」「」」

全員が驚く、ここに居るのは道場に居た面子と土郎の嫁さんだ

「実際はいくつなんだい」

「秘密だ、漢娘おとめに年齢を聞くなよ、失礼だろう」

「漢娘おとめって……、所であの技は結局何なんだい」

「ああ、あれか、あれは無音拳、または居合拳と言って風圧を飛ばす技なんだが中々使い勝手が良くてな、攻撃も見えないし」

「なるほど、風圧か……ソレは参ったね」

と笑いながら話す土郎、そして航は何気なく時計を見るとそれなり二時間が経っていた

「長居して悪かったなそろそろ帰るわ」

そう言っつて俺は席を立つ

「もうかい？」

「ああ、悪いが帰るよ」

そう言っつて俺は土郎の家を出た

「ん？なんだこりゃ？」

石みたいなのを踏んだと思ったら、きれいなガラスのような青い石だった

「マジかよ」

どう見てもジュエルシードだった……

「おい、起きろカナカ」

そう言っつて腰に挿してあるナイフを指で小突く

『ん、もう少し』

「廃棄するか（ボソッ）」

『目が覚めましたああ』

「どつでも良いからさっさとこれ封印するぞ」

『オツケー、封印っ』

その言葉と共にジュエルシールドがカナカに吸い込まれていく

「おし帰るか」

『そう言えばマスター、私は寝てたからわかんないけど結局話し合
いはどうなったの？』

「ん〜、まあそれなりにな。息子には嫌われてたけど」

『そうなんだ』

「ち、帰るぞ」

『はい』

そうして自宅に向かおうと足を向けたとき

（殺気！！）

俺はその瞬間その場所を飛び退いた……すると俺の居た場所に電撃
が着弾する

良く見ると周りが結界で覆われている

「行き成り攻撃するのは反則じゃねーかな？」

そこに居たのは金髪の少女

「すみません……あなたの持っているジュエルシードを下さい。そうしてもらえれば危害は加えません」

いや、もう危害くわえられてるし……

「いや、悪いな」

「……そうですか」

そう言うと少女は杖を構える、すると

「はああああ」

後ろからオレンジ色の髪をした女性が殴りかかるうとしてくる

「おおっ」

俺はソレをかわす……何だこの感じ、さっきも感じたけど……この攻撃何処かで見たことあるな……何処でだっけ？

すると金髪の子もコッチに向かってきたわぁ……勘弁してくれ。取り敢えず軽くフルボッコにしとくか……

殴りかかってきたオレンジ髪を無音拳で吹っ飛ばす

「アルフっ」

金髪がそう叫ぶ……アルフって言うんだアイツ、まあいいや

そして金髪も近づいてきたので無音拳で吹っ飛ばす

「フエイトっ、こんのおおおお」

おおっ、スゴイ形相でコツチに向かってきた。仕方ないと思いつつ攻撃をかわす、そして腹を殴り身体が一瞬浮いたところでまわし蹴りを食らわす

「じゃ、そゆことで」

俺は結界に穴を空け逃げる

「ふう、疲れた」

家に向かおうとするが、そういえば酒が切れていたことを思い出した。

「買って来るか」

そう口走り俺は商店街に向かった

「ただいま」

俺は家に着き靴を脱ぐ

「お帰りなさいマスター」

リニスが出迎えてくる

「おう、そつだコレやるよ」

その言葉と共に投げられる茶色い物体、何とかリニスはキャッチする

「何ですかコレ」

「ケータイだ、連絡するのに使うだろ」

「こんなの悪いですって」

リニスは申し訳なさそうに言う

「もう、契約したから返されても困るんだけど。まあ貰っとけて」

「わかりました」

「腹減ったしメシある?」

時計を見ると夕方を過ぎている、普通に夕食の時間だ

「はい、出来ていますよ」

俺はリビングに向かった

「ふう、食った食った」

「お粗末さまです」

リニスは使い終わった食器を片付け終わるとリビングに来た

「なあ、リニス。お前の依頼の事なんだが……詳しく聞かせてほしい」

リニスは航の真剣な表情を見て話す、今までであったことを……

「なるほど、解った。サンキユ。もう遅いし寝るわ、お前も早く寝

るよ」

そう言って航は自室に入ってしまった

俺はケータイを取り出し電話をかける、少しの電子音の後相手が出る

『もしもし、君から電話して来るなんて珍しいね、何か用かい？』

「真面目な話だ、もしかしたらお前ら上位種がこの世界に来ているかも知れない」

電話越しに息を呑むのが聞こえる

「それは本当なのかい？」

「ああ、たぶん本当だ」

「多分？」

「うちに居る使用人がソイツに会ったらしい」

「わかった、こちらでも調べてみる、すまないね」

「まったくだ、ボケナス」

そして電話が切れた

「寝るか」

そして俺はベッドに飛び込んだ。

決闘？いや俺そんなキャラじゃないし……（後書き）

誤字脱字などがありましたらご報告ください。

あと感想などが貰えたら作者のやる気がアップします。

訓練……さあ、僕と一緒にリリースフットキャンプで鍛えよう(前書き)

かなり投稿まで時間がかかりました。すみません

それではどうぞ

訓練……さあ、僕と一緒にビリーズブートキャンプで鍛えよう

今日も何時もどおりリニスに稽古をつけている

「まあ、大体基礎は出来てきたな、じゃあ休憩したら次の訓練をやってみるか」

そう言っただけはリニスにタオルを渡す

「はい、お願いします」

ありがとうございますとリニスは言いタオルを受け取ると芝生の上に座る

「まあその前に、俺の流派は一言で言うところのどんな戦場でも戦えて生き残れるように考えた流派なんだが名前は戦術流いくさせんじゆつりゆうつーんだが、まあ色んな型があつてな槍、刀、鞭、剣にしても長剣や短剣それに無手とかまあそれ以外にもあるんだけど、大まかに言えばこの位なんだが……お前は何をやりたいんだ？」

「そうですね……、んー」

頬に手を当てながらリニスは少し考える

「やはり無手がいいですね魔法と組み合わせる使える」

「わかった、これからは無手を基本的に鍛えていくことにする。まあ今日は何も無いから一日中鍛えるぞ」

「いや、マスターの場合ほとんど毎日が何も無いですよね」

.....

「.....」

『あはは.....』

カナカの乾いた声が庭に響いたような気がした.....

「無職でスイマセン」

リニスも慣れてきたな.....

「まあいいや、あと二時間くらいで昼飯だからソレまでやるか」

「はい」

そう言っつて立ち上がるリニス

「取り敢えず基礎は出来てるから技を教えるが、最初はまあ簡単なヤツだから」

「はい、お願いします」

「まずこの技だ名前は打鉄^{だてつ}って言うんだがなこの技は踏み込みは素早くそして細かく、手は殴ることも出来るが今回は基礎だから手は握らない」

俺はリニスに後ろから手をとって握り方から教える

「こうですか？」

実際リニスは飲み込みが早いからはつきり言ってソコまでの苦労は無い

「そうだ。この技は一点に威力を絞る技だ、使いどころさえ間違えなければ確実に相手を倒せる。威力は魔法を使わなくてもコンクリくらいは破壊できるぞ」

動き方からを教えていると三十分は経っていた

「まあ、型や踏み込みコレくらいでいいだろう、実際にやってみるから見ていろ。カナ力標的を出せコンクリでサイズは人型だ数は二つだ」

『オツケー』

そう言うとカナ力はデバイスの収納空間からコンクリを出す

「見てるよ……フツ」

その掛け声と共にコンクリは一部だけ穴が開く

「まあこんなもんだ、一部だけ穴が開くのは力のコントロールが上手くなってからだな。今のお前はコンクリを壊すことを考える。まっ、やってみる」

そう言うとりニスは穴が開いていない方のコンクリに向かい合う

「フッ」

その掛け声と共にリニスは教えた動きを再現する……がしかしコンクリートにはビビーンと入っていない居ない、そして……

「ック」

一瞬リニスは苦痛に顔を歪める

「ほらみる、踏み込みと手から手首の使い方が甘いからそうなるんだ、少し見せてみる」

「え、ちょっと、マス　痛っ」

リニスの手を見るとやはり手首が赤くなっていてどう見ても痛めていた

「はぁ……」

俺はため息をつきながらリニスの手首に回復魔法をかける、すると見る見る手首の赤みが引いていく

「あ、ありがとうございます」

「ほれ、コレも巻いておけ」

そう言って手を補強するバンドを渡す

「はい」

リニスは返事をする手首にバンドを巻こうとするが片手で巻こう
としているため上手く巻けない

「貸してみる」

そう言うと航リニスからバンドを取りリニスの手首に巻いていく

「これで大丈夫だ、訓練を始めるぞ」

「はい」

「ハアツ、ハア、はあ」

「まあこんなもんか」

アレから一時間と少しが経過した、リニスは全身汗だけで息も途切
れ途切れなのに対して同じくらい訓練を手伝った航は汗一つかかず
に立っている

「おーし、午前はこんくらいで終りだ今日の昼飯は

」

そついい航はリニスを見る、ココ最近昼食はリニスが作っていたの

だが肝心のリニスには疲れてほとんど動けない

「出前でもとるか、ほらリニス立て、シャワーでも浴びて来い」

「はい、すこし待ってください」

そう言い終わるとリニスはゆっくり立ち上がり二人は屋敷に戻っていった。

ドアを開け浴室に入る

コックを捻ってシャワーを出す

シャワーから出たお湯は髪を濡らし身体を伝い流れていく

「ふう」

私は一息つく……今日もほとんど手も足も出なかった……

でも、少しずつだけど確実に力が着いてきている、それだけはわかる
マスターと居ると自分の無力さがわかる。けど、だからまだ強くなれることがわかる。

プレシア、待っていてください必ず助けに行きます。

でも、マスターはどれだけの鍛錬を重ねてあの強さを手に入れたんだろう

そんな疑問が私の脳裏をよぎった……

身体を洗い終えた私は浴室を出てタオルで身体を拭き着替えリビングに向かった。

「おう、早かったな。ちょうど届いたところだからまだ熱々だぞ」

そこにはタバコを啜えながらたくさんある食べ物の箱を開けているマスターが居た

「……あの、マスターこの箱の数ざつと見て二十はあるんですけど……」

「いやあ、なんかチラシを見てたら色々食べたくなっちゃって」

「はあ……なっちゃってじゃないですよ。もう……二人じゃこんなに食べられませんよ」

そう言いなが私は頭を抱える

「まあ余ったら冷凍すればいいじゃん。生ものは先に食べて」

「もう……」

ああ……頭が痛くなってきそう

「まあいいからさっさと席に着けて、んじゃあいただきます」

「いただきます」

「うんめー、やっぱり宅配ものはこうじゃなっきゃな、なんつーのこう油っこくて味が濃くて」

食事をしている最中にマスターはそんな事を言い出した、ああ……頭が……

「どーしたりニス、頭なんて抱えて？」

「な、なんでもありません……」

「具合が悪いなら一応見てやるぞ？」

「い、いえ大丈夫です」

マスターが原因なんです、なんて言えませんか……

「やっぱり自宅ってのは落ち着くねー、変なものにも襲われないし」

「へえー、マスターでも襲われたことがあるんですか？」

「いやー、襲われたことは何度かあったけどこの間のが一番衝撃的だったわ」

マスターは苦笑しながら言った

「どうしたんですか？」

「いやあ、金髪のツインテールも子供に襲われたんだよ、マジでクソ笑ったわ」

「

」

あ、危なかった……行儀悪く食べ物を噴出しそうになった

「そ、そうなんですか」

「ああ、そしたらオレンジ髪の子にも襲われてな」

マジ焦ったよーとマスターは言うが私の耳には入ってこない

……フェイト、アルフ、二人はまだ……

ああ……逢いたい……

「本当にどうしたりニス」

「い、いえ。……その……その二人は私の知り合いです」

そう言うとマスターはなるほどと言う顔をした

「だからかあ、何処かで見たとある動き方だなんて思ったらお前
かー、納得納得」

「あの、マスター襲われたって言ってましたけど……その、二人に」

「ああ、やり返してないから安心しろ、そいつらはお前が言ったた
依頼に関係してんだろお前の様子を見れば何となくだけどわかる。
これでこの話はおしまいだ。メシが冷める」

そう言われて見ると確かに少し冷めてきていた

「は、はい」

「まあ……、助けたいのはわかるが今は力を着ける、その為にたく
さん食ってたくさん鍛錬を積み……お前はまだ間に合うんだから……
……」

「は、はい」

マスターの言ったとおり宅配された食事は味が濃くしょっぱかった。

「さて……午後の鍛錬なんだけど……どうすっかなあ……」

そんな事を呟きながらタバコを啜える

航は悩んでいた、教えた技は実戦で使えるほどでは無いにしろ教えることは無い、後は同じことの反復練習するだけだった。

「（いつその事もう一つ技教えるか？うん、そうするか）」

「なあリニス、もう一つわ

」

技を覚えないかと聞こうとした瞬間屋敷の外から魔力の奔流を感知した。

流石のリニスも感知をしたのか外を見る

「マスターっ！！」

「わかってる」

外に向かおうとすると

「私も行きます、補助とかは得意ですから」

「（うーん、どうすっかなー……まあ技の特訓にもなるしコッチが補助に回ればいいかあ）」

「わかった、封印は俺がするけどソレまではお前がやれ。あとこれ」

そう言ってリニスにカードの様なものが投げられた。

「えっと、コレは何ですか」

「変装魔法を登録してあるからソレを使っとけ」

そう言っつて航も自分に変装魔法をかける

「んじゃ行くか」

そう言っつて二人は飛び立った

「うおお、すげーなこりゃ」

そこには信じられない速度で成長している大木があった

「こんな速度で成長する木があったら地球温暖化なんてならないんじゃないかね？」

そんなのんきな事言っつてると下から焦った声が聞こえる

「ちょっとマスターそんな事言っつてないで手伝っつてくださいよー」

リニスは襲っつてくる枝を撃退？しながら言っつてくる

「んー、まあガンバー。一応結界張っつて次元震起きないようにしてっから」

と微妙な返事をしながらポケットからPSPを取り出す

「えっ、ちよっ、まっ、マスタあああ」

「甘えんな、コレだから最近のゆとりは……、はあ……」

とてつもない叫び声が聞こえるが気にしな—い気にしない

少しの間ゲームをしているとコッチに近づいてくる反応がある、そろそろ時間だな

「お—い、リニス—、あそこまで道を作ってくれ—」

そう言っつてこの暴走している木の核となっているジュエルシードを指さす

「む、無理ですよ。沢山の枝が壁のようになってとてもじゃ無いですけど壊せません」

「取り敢えず今日やった事を思い出せ、そうすればアレくらいは何とかなるから」

そう言っつとりニスはわかりましたと返事をしてきた。

「（そんじゃ、コッチも封印の準備をしますか）」

「おい、起きろカナカ」

「は—い」

「封印の準備だ」

「オツケー」

リニスの方を見てみるとあまり上手く壊せてないみたいだった、航はそんなリニスの元に降りていく

「リニス、踏み込みをもつと鋭くしろ」

「は、はい」

するともう一度リニスは木の壁に打鉄を打ち込むと不思議なくらい壁が割れた

「カナカ、封印開始」

「イエス、マスター」

するとカナカから封印の魔法がジュエルシードの周りを囲み封印が完了してカナカの中に入っていく

「んじゃあ封印もしたし帰るかあ」

結界を解こうとした瞬間後ろから幼い声が聞こえてきた

「そのジュエルシードを渡してください」

「それはとても危険な物なんです」

ソコにはイタチと子供が居た

これからどうしようかと航は考えながらリニスの方を見る

「えーと……どうしますマスター？」

リニスが聞いてくる

「（リニス……合わせるよ）」

「（えっ、何をするんですか？）」

リニスの念話を無視する航

「ああ、お嬢ちゃん、えーとコレだね」

そう言っただ航はジュエルシードを取り出す、その仕草に渡してもらえると買ったのか安堵の表情を見せる一人と一匹

「それじゃあ　　逃げるぞっ」

「えっ、ちよっ、マスター」

その声と共にリニスもギリギリだが着いていく、あまりに急な事でそこに残されは者達は啞然としている

「えっ？」

「な、なのはっ、あの二人遠くに行っちゃっうよ、追いかけるなきゃ」
「う、うん!!」

しかしもう既に航とりニスは逃げ切っていた

「ふう、あぶねえ。誰だよあのガキ、漂ってる魔力が半端無いぞ」

一瞬、管理局か?と考えるがすぐに否定する

「まあなんにせよ油断は出来ねえって事だな、変装魔法しといてよかった」

「ま、マスター待ってください」

後ろから息を切らしながら近づいてくるリニス

「お前……体力無さ過ぎだろ……それに、ここ」

そう言って呆れながらリニスのわき腹を触るとリニスは顔を歪める

「痛むか、まあこの位なら湿布貼っておけばすぐに直るから」

「はい」

「あと、もう一つ技を教えるから覚悟しておけよ」

「ええっ!!は、はいいい……」

流石にこれ以上訓練量を増やされるって聞いたところなるか……

「まあ、明日からだから安心しろ。取り敢えず今日は帰るぞ」

「あつ、マスター済みません、商店街に寄ってからで良いですかね？冷蔵庫の食料が丁度無くなっているんですよ」

「んじゃあ、ホレ、ついでにゲームと酒よろしく。コレがゲームの予約表だから、酒は適当にヨロシクそれと金は渡しとくわ」

「わかりました、日が暮れるまでには帰りますから」

「んじゃ」

そう言って二人は分かれた

この時リニスは思っても居なかった……航に頼まれたことがあんな事になるなんて……

「ふぁ……夕飯まで少しあるし帰ったら寝よ」

そう言って航は屋敷に戻っていった

訓練……さあ、僕と一緒にピリースフートキャンプで鍛えよう(後書き)

最後の伏線はあんまり関係ないので気にしないで下さい。

誤字脱字などがありましたらご報告ください。

何で私がこんな目に（前書き）

内容の薄さがとても気になりますがそこから辺はスルーの方向で願
いします。

それではどうぞ

何で私がこんな目に

俺が家に着いてのんびりとしているとリニスが帰って来た。

「おー、お帰りー」

ドタドタという音がすごい勢いでコッチに向かってくる

「マスター！！なにのん気なこと言ってんですか！！」

リニスがすごい剣幕で言い寄ってくる

「ど、どうした？あんまり怒ってばっかいるとシワが増えるぞ」

「『どうした』じゃありませんよ。マスターに頼まれた物買いに行ったらヒドイ目にあっただんですから！！」

一時間程前

「えーと、これがマスターに頼まれたお酒ですね」

うーん、マスターはお酒なら何でもいいって言ってましたけどいつも飲んでるコレにしますか
レジに持って行ってお会計をしますか。

「これで買い物はほとんど終わりました。あとはマスターに頼まれたもう一つの方ですね」

予約表に書かれてあるゲームのお店は歩いてすぐの場所にありました、というか商店街の中にもありました。

お店に入るとレジがすぐそこにあって店員が居ました。私は店員さんと呼んで予約表を見せます

「すみません、ゲームを予約したのですが」

「あっはい、予約表はお持ちですか？」

「はい、コレです」

そう言って予約表を見せる

「えっ、！！わ、わかりました、すぐにお持ちいたします」

一瞬変な顔をされましたけど問題なさそうです
レジで待っていると

「こ、こちらが予約されていたゲームの『陵辱学園』と『私は奴隷ご主人様私を飼ってください』と『陵辱王国ただいま奴隷出荷中』」

「は……は」

ええっ？！

え

「こちらの三点は初回限定版なので特典がつきます、あと当店限定の紙袋が二点着きます。」

「はい」

リニス は顔を赤くする

原因はその紙袋……いや、紙袋に入っているイラストだ
そのイラストは少女のあられもない姿が書かれている

そしてその紙袋を持ちながら商店街を歩く、道行く人はすれ違った
びに再度リニスを見る

うう……

とリニスはうめく……そして思った『帰ったら絶対文句をいってやる』と

そう思いながらリニスの足取りは屋敷に向かった

「って事があったんですよっ!!どうしてくれるんですか!!もうあの商店街に行けないじゃないですか!!」

「お、おう。ソレは大変だったな」

「はあ……もういいです……夕飯準備します」

「リニスゲーム渡しておくれ」

そう言って手を出す航、するとその瞬間プチッとナニカが切れる音がする

「こ、こんな、こんなゲームの所為でええええ」

「うわぁ!!ちよっ、おま、買ってきたゲームを投げるな!!」

そう言いながらもキッチンとキャッチしている航

「だからと言ってそこら辺にある物を投げんな」

少しの間こんなやり取りが続いたがリニスが正気に戻る

「み、見苦しいものをお見せしました……」

「お、おう。わ、分かってくればいいんだけど……」

ヤバイ……すっげえしょげてる……話題変えなきゃ……

航はめんどくさいと思いながらもリニスに話しかける

「お、お前さ、スツゲエ動きがよくなってるよな、もう幾つか技を教えようと思ってんだけどどうする?」

……

……

……

「……そ、そうですね?」

俺は、よしこのまま行けばと思ってた時期があったのだが

「でも精神面ではダメですね……はあ……」

駄目だった……もう少し慰めてみるかあ……

「マスター、先ほど言っていた新しい技というのはどのような技なんですか」

俺はリニスを全力で慰め何とか普通の状態に戻してリニスに夕食を作ってもらい、ソレを食っている最中にそんな事を聞いてきた

「んと、防御系の技と色々なことに使える万能な技を一つずつだな、今回は攻撃系は無しだな。取り敢えず明日から練習するぞ」

「防御系ですか……何で攻撃系は無しなんですか？」

「んー、理由は色々あるけど……まあ一番の理由は……お前今日の木のヤツでダメージ受けてただろソレが一番の理由だな、まあかつこよく言うなら自分の身を守る様になってから攻撃をしろって事だ」

「……わかりました」

リニスは渋々といった表情で返事をする

「なあなあリニス」

「何ですかマスター？」

「どやっ」

「はあ……そんなことやってないで食べてください」

ちえ………ひどいな

「はい……」

そんなこんなで夕食は終わった

何で私がこんな目に（後書き）

誤字脱字などがありましたらご報告ください。
感想などが貰えたら作者のやる気が上がります。

リニスな日々 意味が解らないって？大丈夫だ俺も解らない（前書き）

ココまで来ればわかる人も居ると思いますがこの小説はリニスガメ
インヒロインです。

それでは遅くなりましたが本編のほうをどうぞ。

リニスな日々 意味が解らないって？大丈夫だ俺も解らない

使い魔リニスの朝は早い。別に使い魔のベースが山猫だから、と言う訳ではない……では使用人だから……？と言う訳でもない……元々彼女は起きるのが早いだから今日も早く起きた、ソレだけなのである……

「ふあ……」

リニスは目を覚ます、そしてその目は窓を通して空を見る……空は冬が終り春なのだがまだまだ暗い。
そして彼女は寝巻きを着替えて顔を洗うために部屋を出る

顔を洗い終わると彼女はキッチンに向かう朝食準備のために……

「よしっ、今日の朝食は……」

そう言っつて私はキッチンにある冷蔵庫をあけます。確か昨日買った新鮮な魚があるから朝は焼き魚にします

「魚は……あるし他には……この材料だと煮物とお味噌汁がつかれますね」

あとで、食材買いに行かないと駄目ですね……などと思いながら食材を取り出し下味をつけていく

少しして料理が完成すると後は……

「おお……美味そうだな」

マスターが起きてきました、どうやら匂いにつられてきたようです

「おはようございます、珍しいですねマスターが自分で起きるなんて」

「今までリニスが俺をどういふ風に見てきたかその一言で分かっちゃうな、おい」

そんなこと言われましても……とリニスは苦笑を浮かべながら言う

「何か用事でも有るんですか？」

実際マスターが一人で目が覚めるのはとても珍しいです……実際に
会って日は浅いですがソレぐらいは分かります

「んまあな、三、四日帰らないから」

「はあ……また女性ですか……」

もう一つ言うことはマスターは女癖の悪い人です、常に複数の女性
と関係を持っています

「別にいいだろ、ソレよりメシだメシ」

そう言っつてリニスが食事を全てテーブルに置き席に着くと

「んじゃ、いただきます」

「マスター、漫画を読みながら食べないで下さい行儀が悪いですよ
そう言っつてリニスは漫画を取り上げる

「分かったよ、ちえ」

「そういえばマスターはいつも漫画かゲームをしていますね？」

「まあな」

そついいながらマスターは焼き魚の骨を取り分けていく

「何ですか？」

「いやまあ……楽しいし……読んでみるか？」

「いえ、少し前にも同じ事を言われて読みましたけど……」

「そう言えばそうだったけ」

「はい」

なんとというかマスターの本は

「なんでマスターの本のほとんどが幻想ファンタジーなんですか？」

「そりゃあ、幻想ファンタジーが好きだからだよ、面白いじゃん夢があるし」

「そうなんですか？こう言っただけはなんですけど実際に魔法があるのにファンタジーって如何かと思うんですけど」

「別にいいだろ、お前は何か気に入ったのは無いのか？」

「少しだけなら有りましたけど」

「なんだよ、お前も人のこと言えないじゃん」

そう航が言つとリニス少し頬を赤くする

「で？何が面白かった？」

航は知っているがあえてリニスに聞く

「いや、まあ、その……」

やはり少し恥ずかしいのかりニスは口ごもる

「まあいいや、んじゃあ、ごちそうさま」

そう言っつて航は食器をさげる

「俺、もう少ししたら出かけるから」

そう言っつてマスターは外に出ようとドアに手をかける、しかしその手がふと止まる

「ああそうそう、この後一応訓練するから片付け終わったら庭に集合な」

「はい、分かりました」

リニスは航より少し遅れて食事を終えて食器をかたし終えると航の言われた通り庭に集まる

「んじゃあ、この間教えた打鉄意外にも二つ教えたたる鎧よろいと天駆あまがけだ」

鎧は身体のに魔力を展開する技だがバリアジャケットとは違い常時展開できないが相手の攻撃があたる箇所に展開すればプロテクションよりも魔力の消費を抑えることが出来る。

そして天駆けは移動魔法だ、最近では飛行魔法の方が一般的だがこの魔法の良い所は飛行魔法より使う魔力が少ないそして空中での格闘戦に向いている事だ格闘に必要なのは足場だ、この魔法は足場を作

る魔法なのだ

。

取り敢えず最初は教えた技を反復的にやらせなれさせる。そしてある程度ものに出てくるとリニスに話しかける

「まあ、それなりに出来ているから次は実践的な訓練をするだけなんだが……いつてみるか」

そう言い航はポケットから何かのスイッチを取り出しボタンを押す、するとリニスのすぐそばに一体の人の形をした木が現れる

「えっと……マスター何ですコレ？」

そう言いリニスは不思議そうに人形を見る

「それは対人訓練用木製人形だ略して木偶人形のでつくんだ」

「はあ……でつくんですか……」

リニスはめずらしそうにでつくんを見る

「言っとくけどコイツは結構強いぞ、これからはコイツを相手に訓練するぞ訓練内容は制限時間まで立っているか、でつくんを倒すかどうかからだ。一応魔法も使っているから」

「わかりました」

「そんじゃあいくぞ、えーと最初だから十五分で行くぞ」

「はい」

「んじゃあ、スタート」

航の合図が終わるとカウントダウンが始まる3、2、1

ゼロと言うカウントと共にでっくんが勢い良くリニスに急接近する。

「えっ？ちよつ、マ、マスター」

リニスはかろうじて避けながら航に何か言おうとする

「逃げんのも良いけど教えた技使わないと訓練になんねーぞ」

「そんなこと言われても」

「そんなんだからこの間のジュエルシード如きで苦戦するんだ……あの程度簡単に制圧できなくてどうする、そんなんじゃ助けたいやつも助けられないし、救いたいヤツも救えないぞ」

最後の一言がリニスの中の何かに火を付ける。そしてリニスは一旦後ろに跳び距離を取り構える

「いきますっ！ー！」

リニスはでっくんに向かって飛び込んでいった。

十五分後

結果を言えばリニスはボロ負けだった。それはもうヒドイくらいに、リニスが繰り出した拳はかわされ敵を倒すための蹴りもかわされリニスが一方的にやられていた……

「おい大丈夫かー」

「だ、いじよ、うぶ、です」

リニスはゼエゼエと息を切らせながら返事をする

「少し休憩してから再開するか」

「はい」

少しずつリニスの呼吸が整ってくる

「今回のお前の敗因はだな、攻撃を受ける時一瞬目を瞑っただろ」

「……はい」

「だから何度も言っているだろ鎧を使うには攻撃を受ける場所を最後まで見ていないといけないんだって。まあ……それは癖だからな、しばらくはどうにもならないけど。」

「それは、自分でも解っています」

「まあ、さっきも言った通り慣れだから。それと、コレ飲んで気合入れとけ」

そう言っただ航は小さなビンをリニスに渡すそのビンには『ウソビタミンX』と書いてあった

「……何ですかこの怪しい飲み物は？」

「一言で言えば回復薬だ。まあ飲んで見ろって」

そう言われ飲んで見ると実際に身体が軽くなるのを感じて気だるさも無くなった

「本当に何なんでしょうか？」

リニスはスゴイと思ったが無味無臭でまるで水を飲んでいるかのようなのが逆に少し怖かった

「んじゃあ、始めるか」

「はい」

リニスの返事を聞くと航はまたポケットから先ほどのスイッチを取り出してリニスに投げる

「ほれ、取り敢えず毎日コレ使って訓練しろ。」

「はい」

「一応言っておくが、辛いなら止めても良いんだぞ。別に誰もお前を責めないぞ」

「いえ」

リニスの目に決意の光が映る、航はソレを感じ取ったのか「そうかと一言だけ言う」

「そんなじゃあ始めんぞ。スイッチの使い方は解るよな」

「はい、先程見ていましたので」

「取り敢えず時間はさっきも言った通り十五分な」

「解りました」

そう言っつてスイッチを押すリニス、するとカウントダウンが始まる。

3、2、1

そしてゼロと共にリニスは飛び込む

十五分後

結果だけ書くとリニスには負けた。しかし善戦したほうだろう。

「まあ善戦したほうじゃない」

航は1000円ライターでタバコに火を付けながらリニスに話しかける

「は、い」

リニスは息を切らせ地面に座りながら返事をする

「安心しろ、そこそこ頑張ってる方だよお前、成長してるよ」

「ありがとう、とうございます」

「あー腹減ったー、もう昼飯時かあ」

そう呟きながら自分の時計を見る航

「そうですね。これからお屋敷に戻って作りますから少し待ってください」

そう言い立ち上がるリニス

「もー、良いのか？」

「はい。すぐに昼食を作りますので少し待っていてください」

「そうか。んじゃ、屋敷に戻るか」

「はい」

そして二人は屋敷に戻っていった。

二時間後

「んじゃあ俺、朝言った通り三、四日出かけるから留守番ヨロシク」

「はい。わかりました。」

そう言つて屋敷の扉から出て行く航を見送るリニス

「さて、私もお仕事をしないと」

そついで屋敷の掃除を始めるリニス。キッチンやリビングそしてあまり使わない部屋の掃除を終えて最後に航の部屋。

「マスターの部屋はあまり散らかっていないからゴミ箱のゴミと棚の上を軽く拭くくらいですね」

リニスが棚の上に置いてあるフィギアを倒さずに拭いているとフィギアの奥からコツンと手に何か触れる、周りの物を倒さないように取り出すと一つの写真たてがあつた、ホコリの付着具合から見ると伏せてあつたようだ。

「写真？」

リニスは疑問に思いながらも写真たての周りのホコリをふき取り見て見ると航と知らない女性が移つていた。

すごい綺麗……髪は雪のように白く肌も瑞々しい……この女性ひてはマスターの

「ッ」

リニスは頭を振る

ソコから先は考えてはいけない気がしたからだ。それから黙つて掃除をしてふと外を見ると結構時間が掛かつてしまったのか空が暗くなつて来ていた

「よし、綺麗に片付きました」

リニスは掃除道具を片付け夕食の買い物をするために外に出かける
商店街は夕時なので色々な人であふれ返っている

「へいらっしやい。今日も夕食の買い物かいリニスちゃん。」

「はい」

八百屋の店主が声をかけてくる。ここの八百屋はリニスがよく使う
ので店主とも仲が良い

「若いのに偉いねえ、今日はジャガイモが安いよ。リニスちゃん可
愛いから色々おまけしちゃうよ」

「そうですねえ……それじゃあジャガイモとニンジンと玉ねぎを下
さい」

「毎度ありっ」

威勢の良い声と共に注文された野菜を袋に詰めて会計をする

「後コレもおまけだよ、リニスちゃんみたいな女の子には少し重
いかもしれないけど持って行ってよ」

そう言ってもう一つ袋を渡す……その中にはメロンが入っている

「えっ？でもコレ……」

「いっていいって」

敵つい顔でシニカルに笑う八百屋の店主、毎回リニスがい物に來ると何かしらをおまけしてくれるのでリニスは申し訳ない気持ちなので何度も断っているのだが退いてくれずに渡してくる

「いつもすみません」

そう言ってリニスは頭を下げる

「オウ、またねリニスちゃん」

そう言って次の店に向かう

「すみません、ひき肉ください」

「おうリニスちゃん、今日はハンバーグかい？」

「外れです。カレーです」

「おおっ、そうだったのかーおじさん外しちゃったなー」

そう言ってアツハツハと笑う精肉店の店主

「それでいくつ欲しいんだい」

「えーと……300グラムをお願いします」

「はいよっ、ウチで作ったソーセージとベーコンも入れとくから朝ごはんにも食べておくれよ」

会計を済ませた時にそんな事を言われて袋の中を見るとソコには確かにソーセージとベーコンが入っていた

「いつもスミマセン……」

リニスは頭を一度下げて次の店でカレールーを調達し屋敷に向かう

「あ……」

リニスは足を止め書店に入っていく

「この本新刊出てたんだ……」

そして一冊の本を手取るがすぐに元の場所に戻し屋敷に帰る為に書店を出る

リニスは屋敷に着くとスグに夕食の準備をした。

ジャガイモをやニンジンそして玉ねぎを刻み順調に夕食を作っていた

そして作り終わると一人で夕食を済ませる

そして使い終わった食器を洗い一息つくと航から渡されたでっくんのスイッチを持って庭に行く

一通り準備運動を終えでっくんのスイッチを押し訓練をする

そして倒されてはまた挑み倒されてはまた挑む。それを数回繰り返して気がつくとき深夜だった。

リニスは訓練を終了させ屋敷の浴場に向かう

ふつと一息つきながら汗を掻いた身体を洗うそして髪をシャンプーで流し終えて湯船の中に浸かる

・

・

・

チャプと音がする。その音と共にリニスは顔を上げる、どうやら湯船の中で寝てしまつて湯の中に顔から浸かつて驚いて目を覚ましたようだ。

リニスは風呂から上がり寝巻きに着替えてベットに向かうその途中で各部屋の電気を消してゆく。

そして部屋に入り日課の日記を記し終えベットに入り読書をする暫く本を読んでいたがやがて眠くなつたのかあくびをする……

「ふぁ……」

リニスは寝る前に薬を数錠飲み横になる。この薬は航から貰つた薬で身体の自然治癒力を高めたり筋肉痛などを無くしてくれたりするやがてリニスは意識が朧になってきて部屋にはすうすうと寝息だけが静かに響く

空が薄っすらと明るくなっている時間帯部屋の中にリリリンと目覚まし時計が鳴る

「ふああ……」

スツと白い手が目覚まし時計を掴みリニスが顔まで寄せて時間を見る

「ああっ、もうこんな時間！！急いで朝食を作らないとっ！！」

ガバツと音がするくらい勢い良く起きるリニス

そして急いで服を着替えてピンと撥ねた寝癖にくしを通すリニス

「ああ、急いでマスターも起きな……いと……」

ああ、そっだマスターは出かけているんだ……

リニスは髪を整えて朝食の前に広い庭の一部にある小さなガーデンに水を捲くために向かう

このガーデンはリニスが航から自由に使っていていいと言われて以来小さな家庭菜園にしているのだ

そして水を捲き終わらせて屋敷の戻り昨日作ったカレーを食べて朝食を済まし、また庭に出るそして準備運動をしてでつくんで訓練す

る……午前中は全て訓練に費やす
時刻は昼食をとる時間になるとリニスは近くの木にココに来る前に
作って置いたおにぎりとお茶がある

少しの間休憩を取り身体を休めながらおにぎりを食べるが限界まで
疲れている所為で如何せん食欲が湧かないのでお茶で流し込む
三十分かけておにぎりを食べ終え身体を軽くほぐす、そしてまたで
つくんを動かし訓練を始める

リニスは疲れて庭に倒れている、理由はでつくんにやられたからだ
……少しずつは対応できているけど結果はいつも同じ。
そしてリニスは不意に目頭が熱くなるのを感じるがなんとかその熱
を押さえ込む……本当に自分が強くなっているのか解らないからだ

「もう一回やったらお屋敷のお掃除にしましょう!」

わざと大きな声を出してモチベーションを上げてでつくんのスイツ
チを押す

最後の一回は惜しかった……

リニスは屋敷に戻り昨日と同じように掃除を終えるが思ったより早
く終り時間が空いたので最近ハマっている料理の本を開く

思ったより熱中していたのか窓を覗くと空は暗い……リニスが夕食
のカレーを温めようと鍋に火に掻けようとするやと屋敷の扉が叩かれ
る音がしたのでリニスは玄関に向かう

「はい。どちらさままで……」

リニスは鍵を開けて扉を開くとソコには

「マスター？」

ソコには航が立っていた、しかも右の頬を手のひらの形に赤くさせて……リニスは航に何があったのか何となく察した

「カレーをこれから温める所ですけど食べます？」

「お、おう」

航を屋敷に入れるリニス

「所で何でマスターはドアを叩いたんですか？鍵を使って入って来ればいいのに？」

リニスはカレーを温めながら聞いた

「鍵を持っていくの忘れたからな……」

「はあ……鍵くらいはちゃんと持ち歩いてくださいよ」

ため息をつきながら言っリニス

「分かってるって」

「いやー流石に今回は拙かったな寝言で違う女の子の名前言ったやつたらしくてさあ、まじで危なかったよ」

そのセリフにリニスはまたため息をつく

「所でリニス、訓練はどうだ一日じゃああんまし進んでないと思うけど……」

「そうですね……あんまり反応に追いつけないですね」

二人分のカレーをテーブルに置きながら答えるリニス

「まああそんなもんだよ、俺が思っていたよりは成長してんだな」

航は感心しながら言う

「そうなのでしょうか？」

リニスは実感がないので全然分からない

「そうなのだよ」

からかう航

「まあ……明日からは俺も手伝うから……暇だし」

「暇なのでしたらちゃんと仕事してください」

「嫌だよ、仕事しなくても金があるのに」

そのセリフにまたため息を吐くリニス

「ああそうだ、はいコレ」

そう言っつて小さな袋をリニスに渡す航

「なんです?」

開けて見ると王家の紋章と言っ漫画の新刊だつた。リニスが気に入っている漫画であつた

「えつ?」

「お前これ面白いつて思つてたんだろ」

「は、はい」

「メシ食い終わつたら読めよ」

「あ、ありがとうございます」

おう、と返事をしながら自分の使い終わった食器を片付けリビングに向かう航

そして数分遅れで食事を終え使つた食器を洗いリビングに本を持っていくリニス

リビングでは航がテレビでバラエティー番組をタバコを吸いながら

見ていた。リニスはソファアに座り航が買ってきた本をいそいそと袋から取り出し読み始める

やがて番組を見終えたのか航が席を立ち部屋に戻ろうとする

「ああ、言い忘れたが明日からの訓練はきついかな」

リニスがはいと返事をするのを聞くと航は部屋に戻っていった

実際に航が言っていた次の日の訓練はきつかった……

リニスな日々 意味が解らないって？大丈夫だ俺も解らない（後書き）

何か最初の方のリニスが変な感じに……ソコはご勘弁を……

誤字脱字がありましたらご報告ください。

また、感想などがもらえましたら作者のやる気が上がります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034t/>

魔法少女リリカルなのは 元医者がゆく

2011年8月22日18時15分発行